

—— 千葉県市原市 ——

かわ 中 遺 跡
川 中 遺 跡

1 9 8 7

若 菜 建 設 株 式 会 社
財団法人 市原市文化財センター

序 文

自然の環境に恵まれた房総半島に位置する市原市は、太古の昔より先人達が生活し、その結果、多くの遺跡が認められております。

今日、景気は停滞気味といわれておりますが、首都圏50キロ圏に位置する当市は、東関東自動車道の建設やゴルフ場など多くの開発にせまられております。それがため、埋蔵文化財の保護と開発の調和を図ることが、重要な課題となっております。

このような中で、近年、社会教育や地域コミュニティの必要性は、急速に高まっており、その一助として、文化財は大きな役割をもつものとその責任の重大さを痛感しております。

当センターでは、埋蔵文化財を調査研究する立場で事業を実施しておりますが、かけがえのない文化財は、国民共有の財産であり、様々な方法をもって市民に環元してゆかなければなりません。したがって、遺跡発表会、見学会などを実施するとともに報告書等の印刷物も広く一般に活用されるよう、今後とも、よりいっそう努力してゆくのであります。

今回の調査は、土砂採取事業に伴った緊急調査で、弥生時代から古墳時代にかけての住居跡など、小規模な範囲の発掘としては、多くの遺構や遺物が検出され当遺跡の重要性を物語るものであります。また、市内には、養老川を代表として、東京湾に注ぐいくつかの河川がありますが、当調査地は、市内の北部を流れる村田川の流域に位置しております。この周辺には、多くの貝塚や、古墳群が存在し、古代には、菊麻国造の支配地であったと推定されております。当調査の結果は、このような歴史的背景の中で、わずかではありますが、当流域の古墳時代前期を中心とした資料を求めることができました。

本報告書は、この成果をまとめたものであり、研究者はもとより、広く市民の文化財保護の理解に活用していただければ幸いです。

最後に、調査にあたり、若菜建設株式会社のご協力と、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員文化課及び関係諸機関の方々の御指導に厚くお礼申し上げます。

昭和62年 3月25日

財団法人 市原市文化財センター
理事長 星 野 一 郎

例 言

1. 本書は、千葉県市原市東国吉字川中95地先に所在する川中遺跡の調査報告書である。
2. 調査は、若菜建設株式会社による土砂採取事業に伴い実施した緊急調査である。
3. 発掘調査、整理作業、報告書作成作業は、以下のとおり行った。

発掘調査……………昭和61年4月11日～昭和61年4月23日

整理作業……………昭和61年4月23日～昭和61年6月30日

担当、調査研究員 田中清美

4. 本書の原稿執筆は、田中清美が行った。
5. 発掘調査から整理作業の過程で、以下の諸機関、諸氏の御指導、御協力を賜った。
若菜建設株式会社、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会教育指導部文化課
6. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1：50,000「千葉、姉崎」を使用した。

凡 例

1. 遺構番号は、調査順及び南側より順次通し番号を付けた。
2. 方位は、磁北を使用した。
3. 遺構と遺物の縮尺は、第1、2、3号遺構を $\frac{1}{20}$ 、第4、5、6、7号遺構を $\frac{1}{60}$ で、また、遺物出土状況（第1号遺構）は、 $\frac{1}{60}$ で、遺物は、 $\frac{1}{3}$ ～ $\frac{1}{4}$ で組んでいる。
4. 図中の焼土、ススは、No320を、土器の赤採は、No111のスクリーントーンで表現した。
5. 遺物観察表の数値で単位のないものは、cmである。遺物実測図で復元遺物は中央線を1点鎖線で表わし、遺物番号は、文章、遺物観察表、挿図、図版とも同じ番号で統一した。
6. 住居址の床の面積は、壁溝を除いたものである。実測図中の床面内の一点鎖線は、踏み固められた面の範囲を表わし、柱穴の間隔は、ピット下端の中心点間の距離である。
7. 当遺跡の標準土層は、概略次のとおりである。

I層 表土攪乱層。腐植土。厚さ20～30cm

II層 黒色腐植土層。厚さ25～50cm（II-1 黒色土5～10、II-2 新期テフラ混入土10～15、II-3 暗褐色土5～15、II-4 ローム漸移土5～10）

III層 ソフトローム層（黄褐色土）厚さ40～50cm

IV層 ハードローム層（黄褐色土）クラックの発達著しく、第II黒色帯を含む（不明確）

V層 黄褐色土ローム（最も明るい）パミス等を含む。VI層 暗褐色ローム（第II黒色帯）

VII層 黄褐色ローム（立川ローム最下層） VIII層 褐色ローム（武蔵野ローム最上層）

本文目次

序 文

星野 一郎

例言、凡例

組織

I 遺跡の立地と周辺環境	(1)
II 調査に至る経緯と調査状況	(4)
III 検出された遺構と遺物	(7)
(1) 第1号遺構(古墳)	(7)
(2) 第2号遺構	(11)
(3) 第3号遺構	(11)
(4) 第4号遺構(住居址)	(13)
(5) 第5号遺構(住居址)	(14)
(6) 第6号遺構(土坑)	(19)
(7) 第7号遺構(土坑)	(19)
(8) その他の出土遺物	(20)
IV. まとめ	(22)

<挿図目次>

第1図 遺跡の位置と周辺の主な遺跡
第2図 遺跡周辺の地形
第3図 調査地区全体図
第4図 第1号遺構実測図
第5図 第1号遺構遺物出土状況(I)
第6図 第1号遺構遺物出土状況(II)
第7図 第1号遺構出土遺物実測図(I)
第8図 第1号遺構出土遺物実測図(II)
第9図 第2号遺構実測図
第10号 第3号遺構実測図
第11図 第4号遺構実測図
第12図 第5号遺構遺物出土状況
第13図 第5号遺構実測図
第14図 第5号遺構出土遺物実測図(I)

第15図 第5号遺構出土遺物実測図(II)

第16図 第6号遺構実測図

第17図 第7号遺構実測図

第18図 その他の出土遺物実測図

<図版目次>

図版1. 調査前の状況、調査地遠景
図版2. 第1号遺構全景、第1号遺構遺物出土状況
図版3. 第1号遺構遺物出土状況(南側及び東側より)
図版4. 第1号遺構全景、第2号遺構全景
図版5. 第3号遺構全景、第4号遺構全景
図版6. 第5号遺構全景、第5号遺構遺物出土状況
図版7. 第5号遺構遺物出土状況、第6、7号遺構
図版8. 第1号、第5号遺構出土遺物
図版9. 第1号遺構出土遺物、その他の出土遺物(I)
図版10. その他の出土遺物(II)

〈表組目次〉

第1表 周辺の主な遺跡	第5表 第5号遺構ピット計測表
第2表 第1号遺構出土土器観察表I	第6表 第5号遺構出土遺物観察表I
第3表 第1号遺構出土土器観察表II	第7表 第5号遺構出土遺物観察表II
第4表 第4号遺構ピット計測表	第8表 第5号遺構出土遺物観察表III
	第9表 その他の出土遺物

組 織

役 員

理事長	星野一郎	(市教育委員会教育長)
副理事長	横濱辰夫	(市教育委員会教育指導部長)
常務理事	岩見一民	(専任)
理事	滝口宏	(早稲田大学名誉教授)
理事	寺村光晴	(和洋女子大学教授)
理事	海上信久	(姉崎神社宮司)
理事	松崎良一	(市企画部長)
理事	斎藤栄亮	(市総務部長)
理事	地引希壺	(市都市部長)
理事	松下隆	(市総務部財政課長)
監事	白鳥一夫	(市会計課長)
監事	斎藤崇雄	(市教育委員会総務課長)

職 員

庶務課

課長	田丸萬富	調査研究員	浅利幸一
主事補	大鐘光江	調査研究員	大村直
事務員(嘱託)	秋田晴美	調査研究員	近藤敏
事務員(嘱託)	藤沢ひとみ	調査研究員	高橋康男
事務員(嘱託)	石渡あゆみ	調査研究員	田所真
調査課		調査研究員	木對和紀
課長	清藤一順	調査研究員(嘱託)	田中新史
主幹	石田広美	調査研究員(嘱託)	半田堅三
主幹	山口直樹	調査研究員(嘱託)	鈴木英啓
主任調査研究員	宮本敬一	事務員	高浦貞子
主任調査研究員	米田耕之助	事務員	長谷川いづみ
調査研究員	田中清美		

I 遺跡の立地と周辺環境〈挿図1.2〉

川中遺跡は、房総半島の中央やや北側、下総台地の南側にあたり、東京湾から東に約10km内陸に入った地点である。当地域は、房総半島の中ほどの長生郡長柄町権現森（標高173.3m）付近などより発し、東京湾に向って西流する村田川の流域である。村田川の流域面積は、約111.9km²、全長20.8kmの河川で、当遺跡は、村田川の一支流で、長柄町七里野付近より北流して、市原市瀬又で本流に合流する地域に属する。遺跡の立地は、この支流を望む西側台地上で、北側と南側に小谷が入り込んだ東に突出した台地上である。台地の標高は、60m前後、支谷との比高差は、約30mを測る。台地斜面は、コンターがきつく、急傾斜を呈する。台地は、いわゆる洪積台地で、関東ローム層（立川、武蔵野を確認できる）が堆積する。また、下層には、古東京湾堆積層の成田層が厚く存在し、当地域の特徴でもある瀬又層といわれる貝層がみられる^(註5)。遺跡近くの崖面にもその露頭があり、トウキョウホタテのような大型の貝類が採集できる。

周辺には、村田川に添って、多くの遺跡が認められている。特に下流域では大規模な調査が実施されている。主な遺跡としては、まず、先土器時代では、調査の進んでいる千原台地区を中心に、ナイフ形石器を含む、いくつかのユニットが検出されている。縄文時代では、撚糸文系、条痕文系の土器群を出土する遺跡が多く分布し、右岸では、ナキノ台、六之台など、左岸では、菊間^(註8)、大厩などが調査されている。貝塚は、右岸に、草刈、有吉北、小金沢など、左岸に、菊間手永^(註9)、多竜台、西鹿ノ原などが存在している。弥生時代になると、環濠を伴う大厩、草刈、西山などの遺跡が認められ、菊間、小田部新地、六之台などでは多くの方形周溝墓や住居址が検出されている。古墳時代では、右岸の川焼台で小型銅鐸2ヶ^(註6、10)が出土し、また、五領期の住居址も他に、下鈴野、馬ノ口などで検出されている。古墳では右岸に、鉄製農具や剣などを出土した七廻り塚古墳^(註12)、地割線の検出された人形塚古墳や椎名崎、草刈などの古墳群が左岸には、小田部、新皇塚などの初期の古墳や大厩、杉山、高田現台などの古墳群が認められている。川中遺跡も川中古墳群として7基以上の墳丘が確認できる。また、住居址も、大厩、草刈など多数検出されている。国造本紀によると村田川の流域は、菊麻国造の勢力地であり、これらの古墳群は、その奥津城と考えられる。また、天武天皇12年（685年）に村田川を境に上総と下総の国境としている。古代では、上総国分寺と同範の軒瓦をもつ川焼窯址や左作窯址などの瓦窯址^(註11)が存在する。住居址は、菊間、草刈などで検出されている。中世には、多くの山城が存在し、右岸には、草刈、小弓、有吉など、左岸では、押沼、高田、犬成などがある。犬成の鳥越塚では、13世紀前半とみられる常滑壺や短刀4本が検出されている。近世では潤井戸に一時期屋が構えられていたが、主に旗本による細かい領地支配が行なわれていた^(註13)。

村田川流域は、市原市内では、養老川流域同様、濃密な遺跡の分布が認められ、歴史上重要な舞台であったことが伺えるが、調査は、下流域が多く、今後、中上流域の調査も期待したい。



第1図 川中遺跡の位置と周辺の主な遺跡 (遺跡名は別表1) 5万分の1地形図「千葉」「姉崎」国土地理院

第1表 周辺の主な遺跡〈挿図1〉

番号	名称	時期	主な内容	番号	名称	時期	主な内容
1	川中遺跡(古墳群)	縄文、古墳他	古墳7、竪穴住居址他	39	大蔵遺跡(古墳群)	弥生～古墳	前方後円墳2他、(文献9)
2	東国吉古墳群	古墳円墳2		40	浅間様古墳	古墳	古墳、(文献10)
3	宮の台遺跡	縄文～平安		41	かねほり塚古墳群	古墳	円墳4基
4	片岡古墳群	古墳	円墳3	42	草刈遺跡(貝塚)	先土器～近世	(文献11、12、13、14)
5	現台古墳群	古墳	円墳15以上	43	中永谷遺跡	先土器～平安	古墳後期住居址130軒他
6	高田城跡	中世					昭和56年度調査
7	柳田横穴群	古墳	5基	44	草刈古墳群	古墳	昭和54年～、86基以上
8	北中野古墳群	古墳	円墳5	45	草刈城跡	中世	昭和56年調査、土塁他
9	南中野古墳群	古墳	円墳3以上	46	大宮神社古墳群	古墳	前方後円墳1、円墳4、
10	東鹿ノ原古墳群	古墳	円墳10、方墳(塚)3				昭和60年一部調査
11	押沼城跡	中近世	土塁	47	鶴牧遺跡(古墳群)	先土器～近世	昭和60年度調査
12	西鹿ノ原貝塚	縄文中期	地点貝塚?	48	川焼台遺跡	先土器～近世	円墳10、方墳3他、小型
13	西鹿ノ原古墳群	古墳	円墳8				銅鐸2、昭和59～61年
14	権現山古墳群	古墳	前方後円墳1、円墳3	49	川焼瓦窯址	奈良、平安	
15	鳥越塚	中世(13世紀)	常滑壺、短刀4、(文献1)	50	ばあ山遺跡	先土器～平安	円墳1他、(文献11)
16	大成城跡	中近世	多郭、土塁、空塚他	51	ナキノ台遺跡	先土器～近世	昭和57、58年調査
17	稲干古墳群	古墳	円墳5	52	野馬掘遺跡	先土器～平安	昭和56年～60年調査
18	多竜台貝塚	縄文中後期		53	押沼遺跡	先土器～平安	昭和56～60年調査
19	寺谷古墳群	古墳	前方後円墳1、円墳2	54	油戸窯跡	歴史	不明
20	長者塚古墳群	古墳	円墳1、方墳1	55	左作窯跡	平安	平窯(文献15)
21	小谷古墳群	古墳	前方後円墳1、円墳4	56	杉ノ台遺跡(貝塚)	縄文～古墳	地点貝塚(消滅)
22	宿後古墳	古墳	前方後円墳	57	小金沢古墳群	先土器～近世	環状貝塚、前方後円墳
23	山王後古墳群	古墳	前方後円墳2、円墳7、 方墳1、昭和50年に前方 後円墳1基調査	58	六通古墳群(遺跡) (貝塚)	古墳、中近世、 縄文	馬蹄形貝塚、円墳、方墳、 (文献18)
24	杉山古墳群	古墳	前方後円墳1、円墳2	59	ムコアラク遺跡	縄文～平安	円墳4他(文献17)
25	下鈴野遺跡(古墳群)	縄文～中世	古墳前期住居址34軒 古墳5基他(文献2)	60	御塚台遺跡	先土器～平安	(文献18)
26	開化野古墳群	古墳、歴史	円墳4～5基他	61	富岡古墳群	古墳、近世	円墳3、方墳1
27	下ヶ谷台遺跡	古墳～平安	(文献3)	62	椎名崎古墳群	古墳	前方後円墳1他、(文献19)
28	(葉木)舞台古墳群	古墳	円墳4基以上	63	人形塚古墳群	古墳	前方後円墳1他、(文献20)
29	荻作古墳群	古墳	前方後円墳1、円墳4 ～5基、(文献4)	64	池入古墳群	古墳	円墳12
30	寒風古墳群	古墳	円墳7、方墳1	65	野田貝塚	縄文～古墳	縄文中期他
31	小田部古墳群	古墳	円墳5、(文献5)	66	馬ノ口遺跡	先土器～平安	円墳2他、(文献21)
32	小田部新地遺跡	先土器～近世	円墳2、(文献6)	67	有吉北貝塚	縄文～中世	昭和60～61調査
33	上ノ台古墳群	古墳	円墳7、方墳1	68	有吉南貝塚	縄文～平安	昭和58～60調査(文献22)
34	潤ヶ広遺跡	古墳～平安	円墳1他、(文献7)	69	城ノ台遺跡	中世	土塁、堀他
35	天王台古墳群	古墳	円墳28以上	70	森台貝塚	縄文	馬蹄形
36	西山遺跡	縄文～近世	環壕他、(文献8)	71	小弓城跡	平安、中世	遺郭
37	久々津古墳群	古墳	円墳6	72	有吉遺跡	縄文～平安	(文献22、23、24)
38	木津古墳群	古墳	方墳2、円墳2	73	瀬又北遺跡	先土器～土師	(文献25)
				74	瀬又南遺跡	先土器～縄文	(文献25)

参考文献 ※表1中の文献

- 文献1 「鳥越塚」千葉県市原市犬成所在中世塚の調査—小川和博、市原市犬成鳥越塚調査会、昭和57年
- 文献2 「下鈴野遺跡」大村直 勸市原市文化財センター昭和62年
- 文献3 「下ヶ谷台遺跡」浅利幸一 勸市原市文化財センター、昭和62年
- 文献4 「荻作一号墳」『市原市周辺地域の調査』市原市文化財報告書3、滝口宏、市原市教育委員会 昭和42年
- 文献5 「千葉県市原市小田部古墳の調査」古墳時代研究 I 中村忠次他 古墳時代研究会 昭和47年
- 文献6 「小田部新地遺跡」山口直樹他 勸市原市文化財センター、昭和60年
- 文献7 「潤ヶ広遺跡」近藤敏 勸市原市文化財センター、昭和62年
- 文献8 「千葉県市原市西山遺跡」鈴木英啓 勸市原市文化財センター、昭和61年
- 文献9 「市原市大蔵遺跡」三森俊彦他 勸千葉県都市公社、昭和49年
- 文献10 「(大蔵)浅間様古墳」浅利幸一 勸市原市文化財センター年報59年度 勸市原市文化財センター昭和60年
- 文献11 「千原台ニュータウンI(野馬掘遺跡、ばあ山遺跡他)小久貫隆史他、勸千葉県文化財センター 昭和55年
- 文献12 「千原台ニュータウンII—草刈遺跡A区(第1次調査)鶴牧古墳群、人形塚—」三森俊彦他 勸千葉県文化財センター、昭和58年
- 文献13 「千葉県市原市草刈遺跡」高橋康男 勸市原市文化財センター 昭和60年
- 文献14 「千原台ニュータウンIII—草刈遺跡(B区)—」高田博他 勸千葉県文化財センター 昭和61年
- 文献15 「千葉市大金沢町左作瓦窯址」古代33号 大川清他 昭和34年 早稲田大学考古学会
- 文献16 「小金沢貝塚」千葉東南部ニュータウン10、郷田良一他、勸千葉県文化財センター 昭和57年
- 文献17 「ムコアラク遺跡、小金沢古墳群」千葉東南部ニュータウン8、田坂浩、白井久美子 勸千葉県文化財センター、昭和54年
- 文献18 「六通遺跡、小塚台遺跡」千葉東南部ニュータウン9 郷田良一他、勸千葉県文化財センター 昭和55年
- 文献19 「椎名崎古墳群(第1次)」千葉東南部ニュータウン沼沢豊他 勸千葉県都市公社 昭和50年

- 文献20 「椎名崎古墳群、人形塚古墳発掘調査概要」 笹生衛
研究連絡誌第19号、(財)千葉県文化財センター 昭和62年
- 文献21 「馬ノ口遺跡、有吉遺跡、白鳥台遺跡」 千葉東南部ニュー
タウン15、大野康男、白井久美子他、(財)千葉県文化財セン
ター 昭和59年
- 文献22 「バクチ穴遺跡、有吉遺跡(3次)、有吉南遺跡」
古内茂他、千葉東南部ニュータウン14 (財)千葉県文化財セン
ター 昭和58年

- 文献23 「有吉遺跡—第1次—」 千葉東南部ニュータウン3
種田齊吾、阪田正一 (財)千葉県都市公社 昭和50年
- 文献24 「有吉遺跡(第2次)」 千葉東南部ニュータウン5
種田齊吾他 (財)千葉県文化財センター 昭和59年
- 文献25 「市原市瀬又北、瀬又南、千葉市大木戸、板倉町遺跡」横
山仁(財)千葉県文化財センター 昭和59年

その他の参考文献と注釈 数字は本文中の注釈と同じ

- (1) 「千葉県の貝塚」千葉県所在貝塚遺跡分布調査報告書
千葉県文化財保護協会 昭和58年
- (2) 「千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書」千葉県教育委員会昭
和61年
- (3) 「日本城郭大系6」千葉、神奈川 新人物往來社 昭和55年
- (4) 「上総山王山古墳」市原市教育委員会 昭和55年
- (5) 「市原市の地形と地質」木村泰治 市原市史別巻 昭和54年
- (6) 「市原市川焼台遺跡出土の小型銅鐸について」榎原弘二、山
口典子、研究連絡誌第7、8合併号 (財)千葉県文化財センター
昭和59年
- (7) 「千葉市村田服部遺跡」金丸誠他 (財)千葉県文化財センター
昭和60年
- (8) 「市原市菊間遺跡」齋木勝他、(財)千葉県都市公社
昭和49年
- (9) 「市原市文化財センター年報昭和57、58年度、近藤敏他
- (10) 「川焼台遺跡出土の2号銅鐸について」相京邦彦、白井久美
子、金子進、研究連絡誌第15、16号、(財)千葉県文化財センター 昭
和61年
- (11) 『企画展「房総の古瓦」解説図録、千葉県房総風土記の丘昭
和53年
- (12) 「千葉県千葉市七廻塚古墳」武田宗久 日本考古学年報11日
本考古学協会、昭和38年
- (13) 「江戸幕府の成立と支配」西脇康 和崎晶 市原市史中巻 昭
和61年

当表は主として、千葉県埋蔵文化財分布地図(2)千葉県教育委員会、昭和61年
千葉県埋蔵文化財分布地図(3)千葉県文化財センター、昭和62年を利用した。
なお、名称の大字名は省略した。文献については、本報告を主としてあつかった。

II 調査に至る経緯と調査状況

(1) 調査に至る経緯

昭和59年4月23日付けで、若葉建設株式会社代表取締役若葉弘は、市原市東国吉字川中95地
先他約14.477㎡の土砂採取事業に伴う、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の
照会を千葉県教育委員会教育長及び市原市教育委員会教育長宛に提出した。それを受けて、千
葉県教育庁文化課と市原市教育委員会文化課の現地踏査の結果により、「土師器散布地1ヶ所、
古墳7基」の回答がなされた。この回答に依り、当地主を含めた四者による度重なる協議の結
果、遺跡の大部分の地域については、開発を見合わせるが、一部の約400㎡については記録保存
を行ない、その後土砂採取を施行する方針が決定した。記録保存に伴う発掘調査は財団法人
市原市文化財センターへの委託事業として、昭和61年4月11日より実施するに至った。

(2) 調査状況

当地は、以前に山林として利用され、杉林を主とする植林がなされていたが、15年程前より
南側斜面からの掘削がなされ、現在では、台地上の一部まで削平されており、遺跡の保存状況
はあまり良くなかった。調査は、上部の攪乱層を除去した後に、主として、ローム漸移層面に
残存した遺構プランを確認し、調査に入る形で実施した。したがって、遺構の上部は、消滅し
ている部分が多い。結果的に本調査面積は約590㎡である。検出した遺構は、主として、調査順
及び、南側より順次、通し番号を付し、「第〇号遺構」の名称で扱った。実測図は、現地で、基
本的に $\frac{1}{50}$ とし、状況に応じて変えた。なお、当遺跡の略式記号は、「セ43」である。

III 検出された遺構と遺物

今回の調査地は、台地南側平坦部及び傾斜面の1部である。以下、遺構番号順に解説する。

(1) 第1号遺構（古墳）〈挿図4、図版2、3、4〉

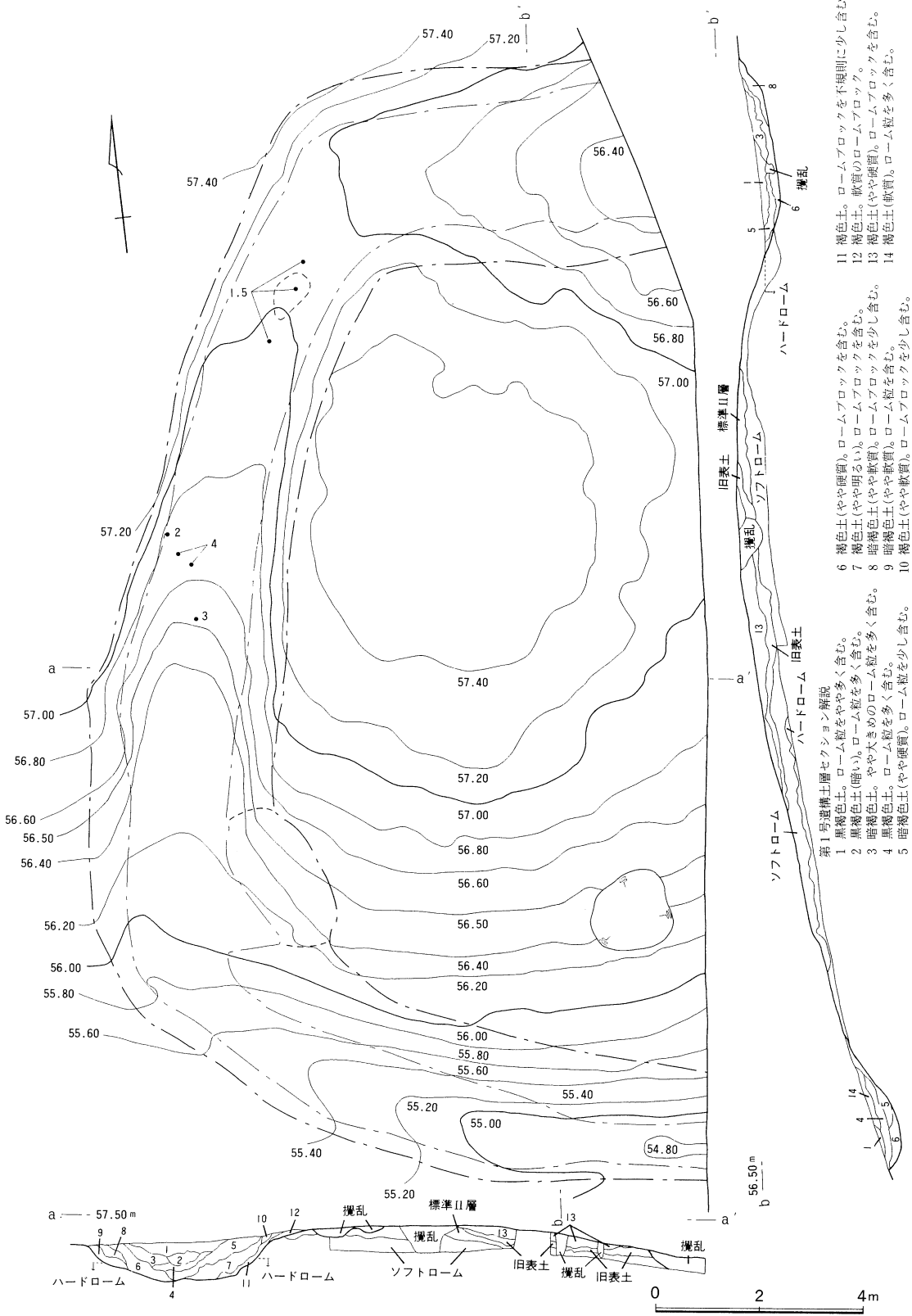
台地端部で、すでに緩やかに傾斜をはじめめる部分に立地する。当遺構の東側は、以前に土砂採取により削除されており、遺構全体の $\frac{1}{3}$ 程度の（推定）の調査にとどまった。また、上部も削平を受けていたが、木の株が残存していたことから、削平以前の墳丘も低かったものと考えられる。なお、図中の墳丘部分のコンターは、上部攪乱層を除去後に実測した。

調査の結果、方形に囲ると推定できる周壕（やや胴張り）とわずかな墳丘を確認した。周壕形体から方墳と推定されるが、確定はできない。その規模は、周壕を含めて、検出最大幅が21.60mを測る。主軸方位は、N-11°-Eと考えている。周壕は、残存状況の差及び立地に依るためか、規模に差異がみられ、西側は広く深く残っているが、南側は幅が狭く浅い。また、周壕底のレベルは、立地のためか、南側は、北側よりしだいに傾斜し、約2.30m低い。底部は、ほぼ平坦である。周壕の規模は、上端幅2.10m~4.00m、下端部0.80m~2.70m、深さは、0.30m~0.80mを測る。立ち上がりは、逆台形状を呈する。墳丘は、北西側を主として、わずかに残存し、最残存部分で約35cm確認できた。墳丘は、1層のみの確認であり、旧表土上に、ロームブロックを含む硬質の褐色土を盛っている。墳丘は、さらに、北西側墳丘部分と南西隅付近及び南東側に攪乱による土壇が認められている。いずれも表土を覆土に含むため、近時の土壇であろう。主体部（埋葬部）に相当する遺構は検出できなかった。出土遺物は、北西側周壕内より壺（No.1）、壺破片（No.5）、西側周壕内より埴（No.2）埴（No.3）器台（No.4）がそれぞれ、底部近くより検出された。調査範囲外の周辺台地上には、7基前後の墳丘が確認でき、川中古墳群を形成しており、本遺構も、その中の1基と考えられる。なお、墳丘の下層には、遺構は検出されなかった。

第2表 第1号遺構出土土器観察表I

単位の無いものはcm、（ ）は推定

挿図番号	a 器種 b 出土位置 c 遺存度	法量 (cm)	器質 { d 胎土 e 焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外 面	内 面
図7 1	a. 壺 b. 北西側周壕底部 c. 全体の約70%	口径24.8 頸部径11.8 胴部最大径29.7 底部径7.2 器高33.0	d. 緻密 小礫は1mm以下を極少含む。 e. 良好	底部は、平底で、胴部立ち上がりは、底部付近でややくびれるが、大きく球状に立ち上がり、胴部最大径は、中位にある。口頸部は、やや長く外反し、口縁部は、有段部分に内外面とも段を有し、大きく外反する。口唇部は、外面に面をもち、断面は三角形形状を呈している。	胴下位一縦方向のヘラケズリ 胴部一縦方向のヘラケズリの後、やや斜め方向のヘラミガキ 胴上位に赤彩痕が認められる。 口頸部一縦方向のヘラミガキ 口縁部一横ナデ 〈色調〉 黒色、赤褐色 淡褐色	剝離が激しい。 胴部一横やや斜め方向のハケ目 口縁部一横ナデ 〈色調〉 淡褐色



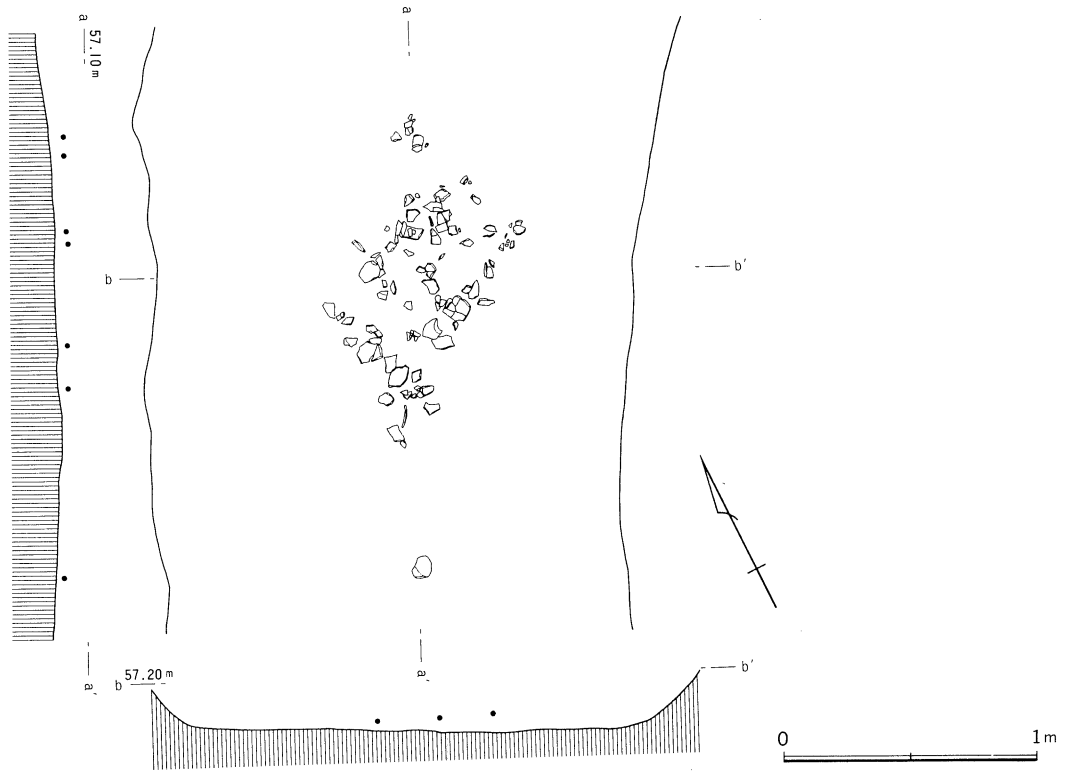
第1号遺構土層セクション解説

1 黒褐色土、ローム粒をやや多く含む。
 2 黒褐色土(暗い)、ローム粒を多く含む。
 3 暗褐色土、やや大きめのローム粒を多く含む。
 4 暗褐色土、ローム粒を多く含む。
 5 暗褐色土(やや硬質)、ローム粒を少し含む。

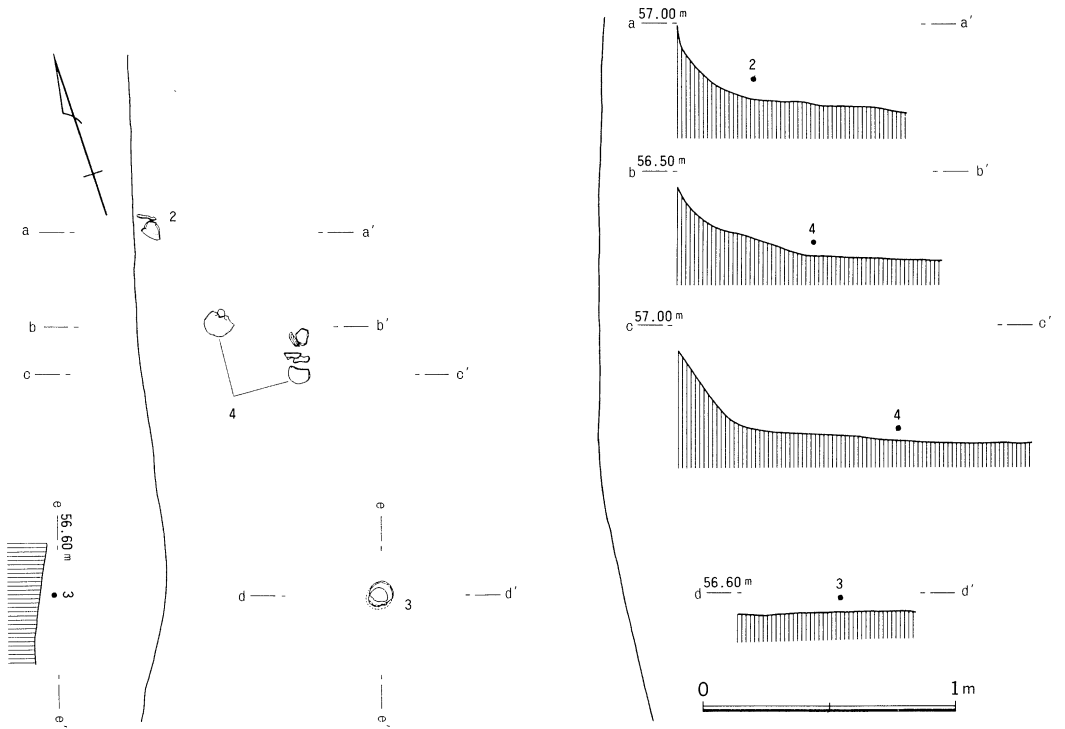
6 褐色土(やや硬質)、ロームプロックを含む。
 7 褐色土(やや明るい)、ロームプロックを含む。
 8 暗褐色土(やや軟質)、ロームプロックを少し含む。
 9 暗褐色土(やや軟質)、ローム粒を含む。
 10 褐色土(やや硬質)、ローム粒を少し含む。

11 褐色土、ロームプロックを不規則に少し含む。
 12 褐色土、軟質のロームプロックを含む。
 13 褐色土(やや硬質)、ロームプロックを含む。
 14 褐色土(軟質)、ローム粒を多く含む。

第4図 第1号遺構(古墳)実測図



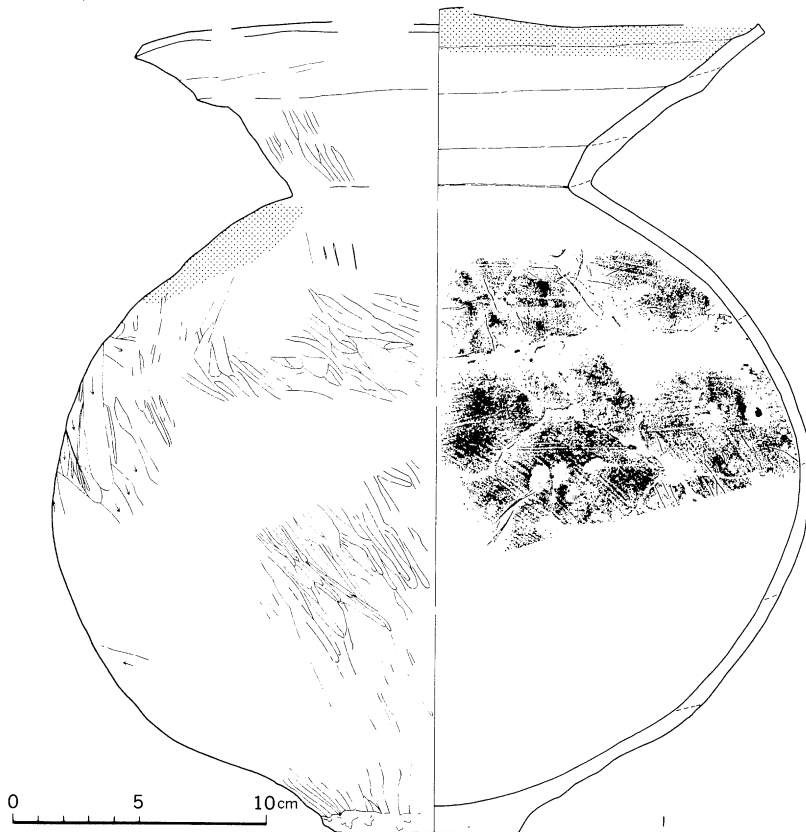
第5図 第1号遺構 遺物(1)(5)出土状況 (I)



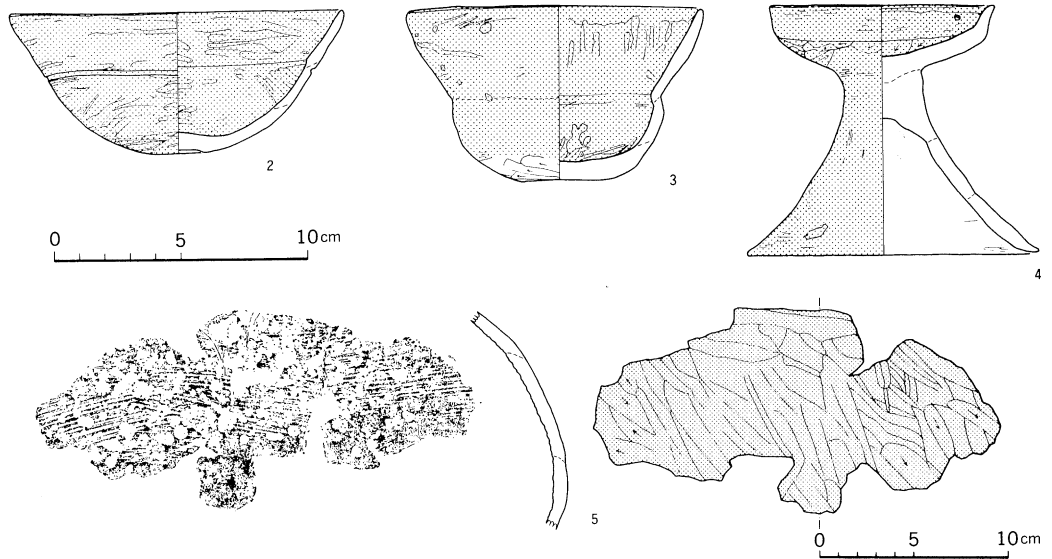
第6図 第1号遺構 遺物(2)(3)(4)出土状況 (II)

第3表 第1号遺構出土土器観察表II

挿図番号	a 器種 b 出土位置 c 遺存度	法量 (cm)	器質 { d 胎土 e 焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外面	内面
図8 2	a、碗 b、西側周壕 c、底部 d、完形	口径 13.2 底径 2.0 器高 5.6	d、2~3mm程の小礫を極少含む。 e、良好	底部は、やや凹む小さな丸底を呈し、体部は、碗状で、口縁部と体部の間に沈線が存在する。口縁部はわずかに内傾しながら外反する。	全面に横及び斜め方向のヘラミガキ、また、全面に赤彩が施される。 <色調> 赤褐色	全面に横方向及び斜め方向のヘラミガキ、全面に赤彩されているとみられるが、体下部は、摩耗により不明確。 <色調> 赤褐色 一部褐色
図8 3	a、埴 b、西側周壕 c、底部 d、完形	口径 11.5 体部最大径 底部径 2.85 器高 7.0	d、緻密小礫1mmを少量含む。 e、良好	底部は、やや凹む。小さな丸底を呈し、体部は、球形であるが、最大径は上位にある。口縁部は、全体の半分を占め、頸部内面に陵をつくりやや内傾ぎみに立ち上がる。	底部一ヘラケズリ 体下位一横方向のヘラケズリ 体中位一横方向のナデ 体上位一横方向のヘラミガキ 口縁部一ヘラナデの後、横方向のヘラミガキ 底部付近以外は赤彩有り。 <色調> 赤褐色一部黒褐色	体下位一縦方向のヘラミガキ 体上位一ナデ 口縁部一縦方向を主とするヘラミガキ 全面に赤彩有り。 <色調> 赤褐色
図8 4	a、器台 b、西側周壕 c、口縁部と脚下端の一部を欠損	口径 8.9 脚裾径 11.6 器高 10.0	d、緻密小礫1mm以下を含む。 e、良好	脚部は、八の字状を呈し、下位は大きく開く、上位は、やや直線的に立ち上がる。器受部は、わずかに直立ぎみに立ち上がる。	脚裾部一横ナデ 脚下位一斜め方向のナデ 脚中位一縦方向のナデ 脚上位一横方向のナデ 器受部下位一横及び斜め方向のヘラケズリ 器受部上位一横ナデ 全面に赤彩 <色調> 赤褐色	脚裾部一横ナデ 脚部一ヘラケズリダシ後、ていねいなナデ 器受部下位一縦方向のヘラナデ 器受部上位一横ナデ 器受部上位に赤彩 <色調> 器受部一赤褐色 脚部一黒褐色、淡褐色。
図8 5	a、(壺) b、北西側周壕底部 c、胴部破片	(器厚0.6)	d、やや荒い3mm前後の小礫を多く含む。 e、普通	球状を呈する壺の胴部破片と推定される。図5-1の壺に似るが接合しない。	斜め方向のヘラケズリの後一部斜め方向のヘラミガキ <色調> 黒褐色	横やや斜め方向のハケ目、剝離が激しい。 <色調> 茶褐色



第7図 第1号遺構(古墳)出土遺物(I)



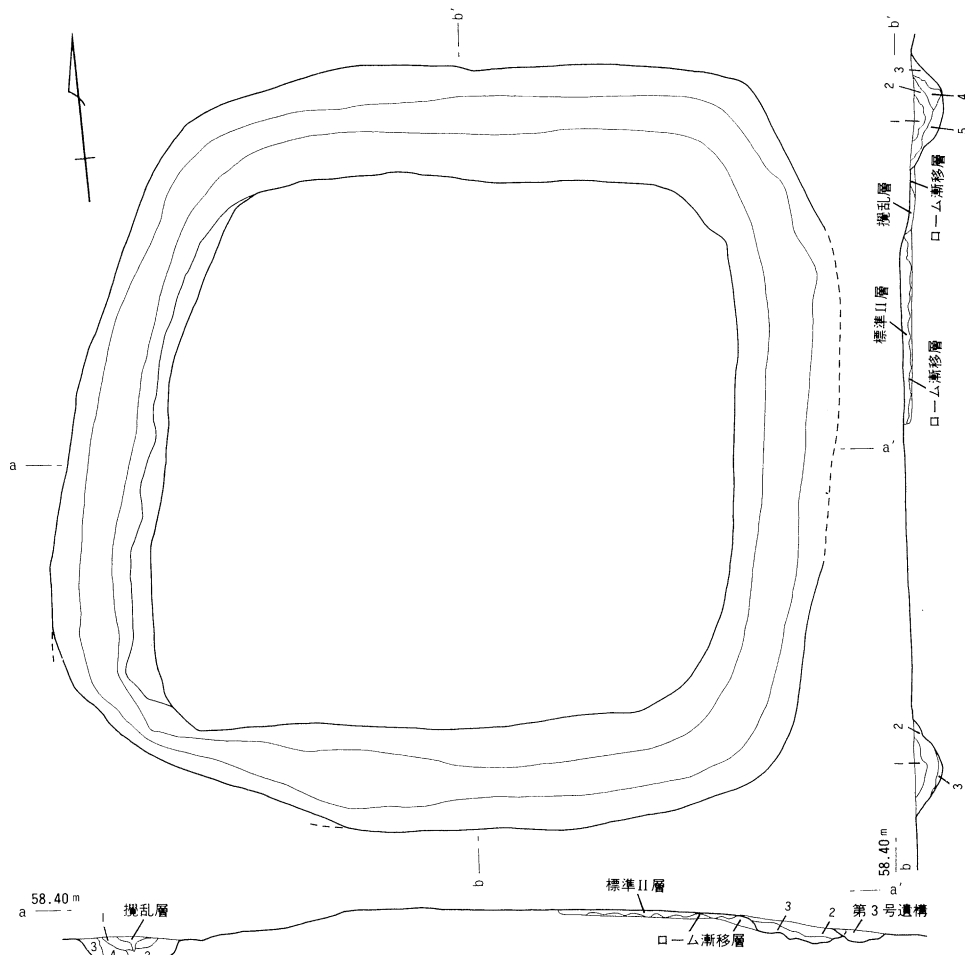
第8図 第1号遺構（古墳）出土遺物（II）

(2) 第2号遺構〈挿図9、図版4〉

台地端部に立地する。第1号遺構から約3.5m北西側に位置する。平面形体は、方形隅丸の溝が四周する。規模は、長軸12.13m、短軸11.97mを測り、主軸方位は、長軸で、 $N-13^{\circ}-E$ を示す。溝による区画内の形体は、同じく隅丸方形で、面積は、約74m²である。周溝は、南西側の残存状況が悪いが、最大検出値で、幅上端1.85m、下端0.95m、深さ0.48mをはかる。立ち上がりは、逆台形状を呈する。溝の底部は、ほぼ平坦である。溝の覆土は、自然埋没を示し、大きく3層に分けられる。溝の区画内は、ほぼ平坦であり、墳丘などの盛土は、確認できなかった。また、主体部（埋葬部）や伴出遺物も検出されていない。本遺構は、特に南西側の削平が激しく、東側溝は、上部が第3号遺構に切られ、さらに、東側溝中央付近で第6号遺構、西側溝中央付近で第7号遺構を、各々切った形をとる。

(3) 第3号遺構〈挿図10、図版4〉

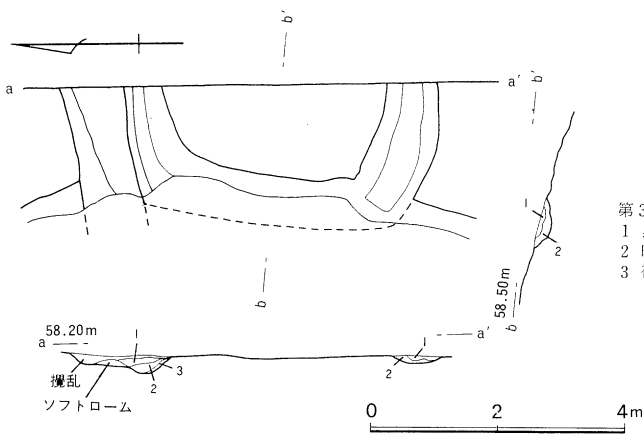
台地端部に立地し、第1号遺構から約5.5m北側に位置する。また、本遺構は、第2号遺構の東側溝を少し切っている。さらに、東側は、土砂採取により削除され、北側の一部は、土壇状の攪乱により切られている。平面形体は、方形を呈する溝と推定され、北側と南側の溝は、やや開きぎみ（胴張りか？）である。規模は、長軸で5.08m、主軸方位は、ほぼ長軸で $N-7^{\circ}-E$ を示す。溝は、検出最大値で、幅上端0.98m、下端0.48m、深さ0.32mをはかる。溝の立ち上がりは、やや丸みを帯びた逆台形であり、狭い底部は、ほぼ平坦である。溝の覆土は、自然埋没であり、大きく2層に分けることができる。溝による区画内は、平坦であるが、地形的なためか、少し東南側に向って傾斜している。墳丘などの盛土は、確認できなかった。また、主体部（埋葬部）や伴出土器も検出されない。本址を方形周溝とすれば、約 $\frac{2}{3}$ 程度の調査である。



第2号遺構土層セクション解説

- 1 黒褐色土(やや硬質)。ローム粒を含む。
- 2 暗褐色土(少し硬質)。ローム粒をやや多く含む。
- 3 褐色土。ロームブロック(軟質)を多く含む。
- 4 黒褐色土(少し硬質)。ローム粒を含む。
- 5 暗褐色土(やや明るい)。ロームブロックを含む。

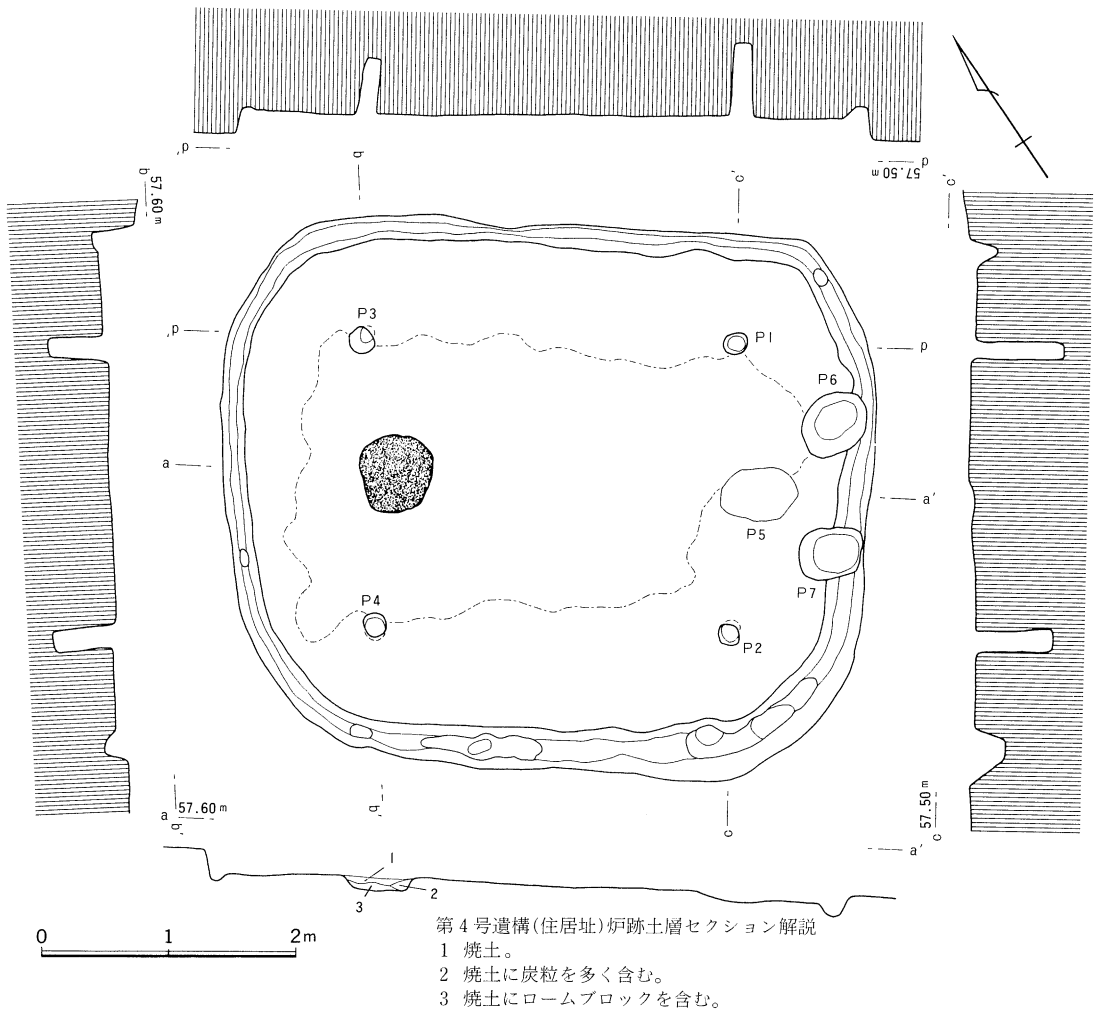
第9図 第2号遺構実測図



第3号遺構土層セクション解説

- 1 黒褐色土(少し軟質)。ローム粒を多く含む。
- 2 暗褐色土(明るい)。ローム粒を含む。
- 3 褐色土(やや軟質)。ロームブロックを多く含む。

第10図 第3号遺構実測図



第11図 第4号遺構(住居址)実測図

(4) 第4号遺構(住居址) <挿図11, 図版5.>

台地端部に立地し、第1号遺構から北西に0.45m、第5号遺構(住居址)より北に約6mの位置である。保存状況は、悪く、特に南西側は、掘削により、壁の立ち上がりは、ほとんどなく、床面が露出していた。平面形体は、隅丸方形であるが、北西側壁と南西側壁は、

やや胴張りぎみである。規模は、長軸5.15m、短軸4.32m、主軸方位は、長軸を測り、N-55°-Wである。壁高は、最大で0.33mである。床面は、平坦で、焼土粒、炭粒が、全体に散布していた。踏み固められた面は、支柱穴間(P₂を除く)と炉の周囲及びP₆まで続いていた。床面の設定層位は、ソフトローム中程である。床面の面積は、壁溝を除き約16.7㎡である。壁溝は、南西側で比較的広くなり、底部は、小ピットも存在する。幅は、下端で4~20cm、深さは、最深部で7cmである。支柱穴は、4本と考えられ、長方形に組み合わせられるが、北東側のP₃が5cmほど北側に張り出している。各柱穴間隔は、P₁~P₂2.30m、P₃~P₄2.33m、P₁~P₃2.90m、P₂~P₄2.80mを測る。また、支柱穴の他に、南東側床面にP₅~P₇のピットが存在する。

第4表 第4号遺構ピット計測表
単位cm

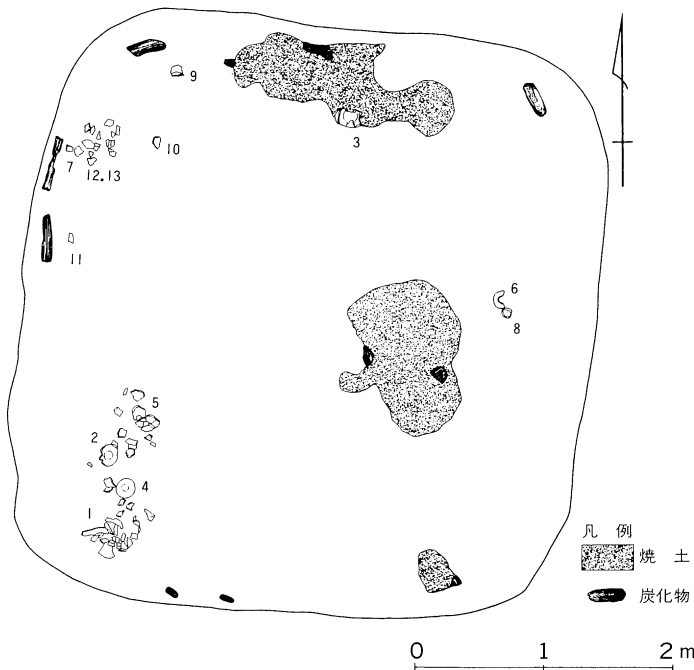
名	上端径	下端径	深さ
P ₁	20×16	14×12	60
P ₂	21×19	15×11	45
P ₃	17×16	17×14	61
P ₄	19×18	18×17	51
P ₅	61×43		8
P ₆	59×47	37×26	22
P ₇	50×42	36×32	34

P₅は、浅く全体が少し硬い。炉跡は、P₂P₄の間、やや床面中央寄りに位置する。平面形体は、不整形円で、立ち上がりは、緩らかである。大きさは、長径62cm、短径58cm、深さ12cmをはかる。炉内覆土は、上部に、焼土が多量に存在し、下部には、焼土とロームブロックの焼土化した土が混合している層である。本遺構からの伴出遺物は、特に検出できなかった。

(5) 第5号遺構 (住居址) <挿図12、13、図版6>

台地平坦面の端部に立地する。第2号遺構の溝の区画内南側に位置している。平面形体は、やや胴張りの隅丸方形を呈し、規模は、長軸4.58m、短軸4.44m、主軸方位は、長軸を測り、N-82°-Wを示す。壁の立ち上がりは、しっかりしており、壁高は、最大残存高で、0.46mである。床面は、平坦で、ソフトローム下位からハードローム上位の層位に設定されている。面積は、約14.5m²である。踏み固められた面は、4本の支柱穴の間及び炉跡と南西側のP₅まで続いている。焼土は、ほぼ全域に認められるが、特に北側と炉跡上位及び南東側床面に濃密に分布している。また、炭化物が、北側や焼土内に検出されている。壁溝は、四周し、北東側と南東側に狭い部分がみられる。幅は、下端で6~20cmで全体に広い。深さは、最深部で12cmをはかる。支柱穴は、4本と考えられ、長方形に組み合わせられるが、北東側のP₃が南に50cmほど片寄っている。また、このピットだけ81cmの深さがあり、他の3本より20cm程深い。各柱穴間隔は、P₁~P₂3.15m、P₂~P₄2.25m、P₃~P₄2.50mである。他のピットは、P₅が南西側に、P₆が南東側隅に存在する。炉跡は、P₃とP₄の間やや床面中央寄りに位置し、平面形体は、楕

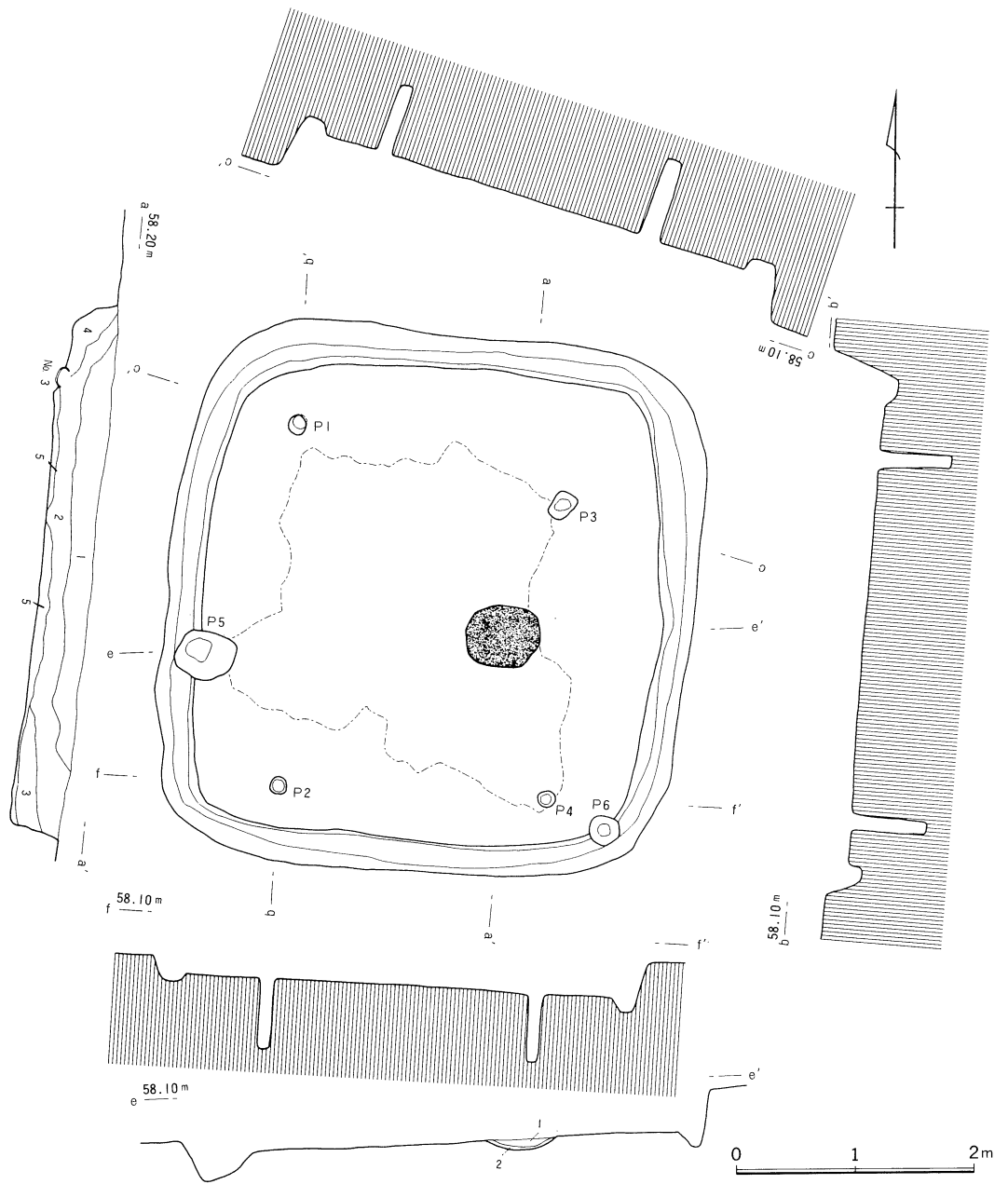
円形で、長径63cm、短径53cm、深さは、8cmをはかる。立ち上がりは、なだらかであり、覆土には、上部に焼土が厚く堆積し、下部には、焼土化したロームブロックと灰を少量含んだ焼土がみられた。本遺構の伴出遺物は、



第5表 第5遺構ピット計測表
単位cm

名	上端径	下端径	深さ
P ₁	17×15	12×12	61
P ₂	15×14	11×10	63
P ₃	27×19	14×9	81
P ₄	15×13	9×8	59
P ₅	48×41	20×19	24
P ₆	26×25	11×10	26

第12図 第5号遺構 (住居址) 遺物等出土状況



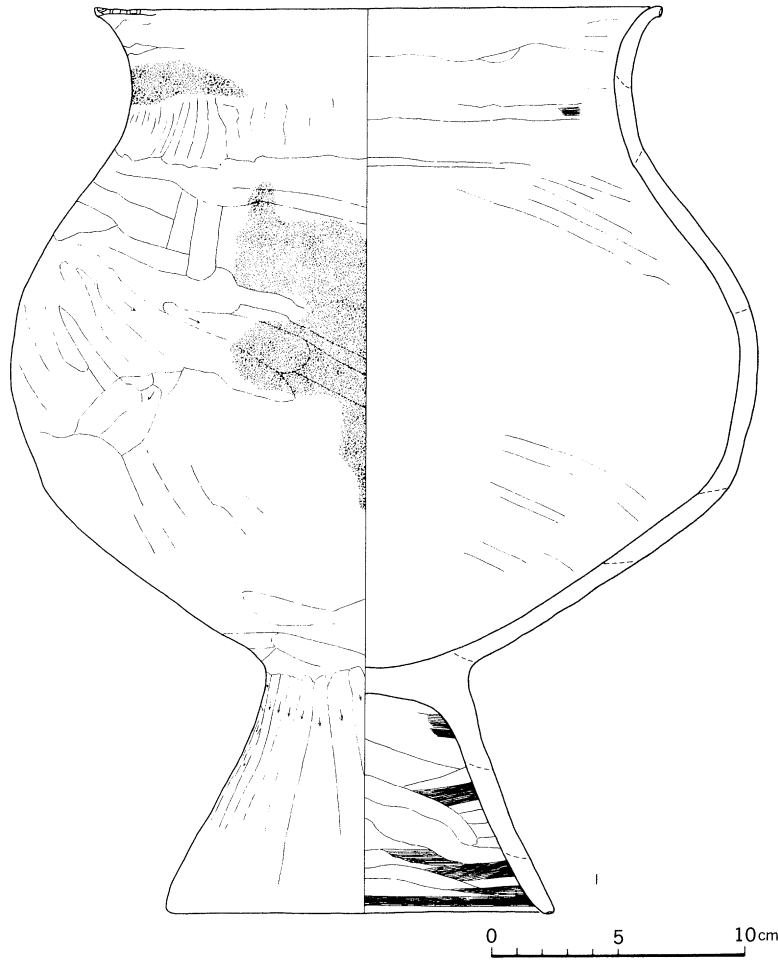
第5号遺構(住居址)土層セクション解説

- 1 暗褐色土(少し硬質)。ローム粒をやや多く含む。炭粒を少量含む。
- 2 暗褐色土(やや硬質)。大きめのローム粒を多く含む。炭粒と焼土粒を少量含む。
- 3 褐色土(やや硬質)。軟質のロームブロックを多く含む。炭粒を少量含む。
- 4 暗褐色土(やや硬質)。大きめのローム粒を多く含む。炭粒と焼土粒を多く含む。
- 5 黒褐色土(少し硬質)。ローム粒を含む。炭粒と焼土粒を多く含む。

第5号遺構炉跡土層セクション解説

- 1 焼土
- 2 焼土に少量の灰とロームブロックを含む。

第13図 第5号遺構(住居址)実測図

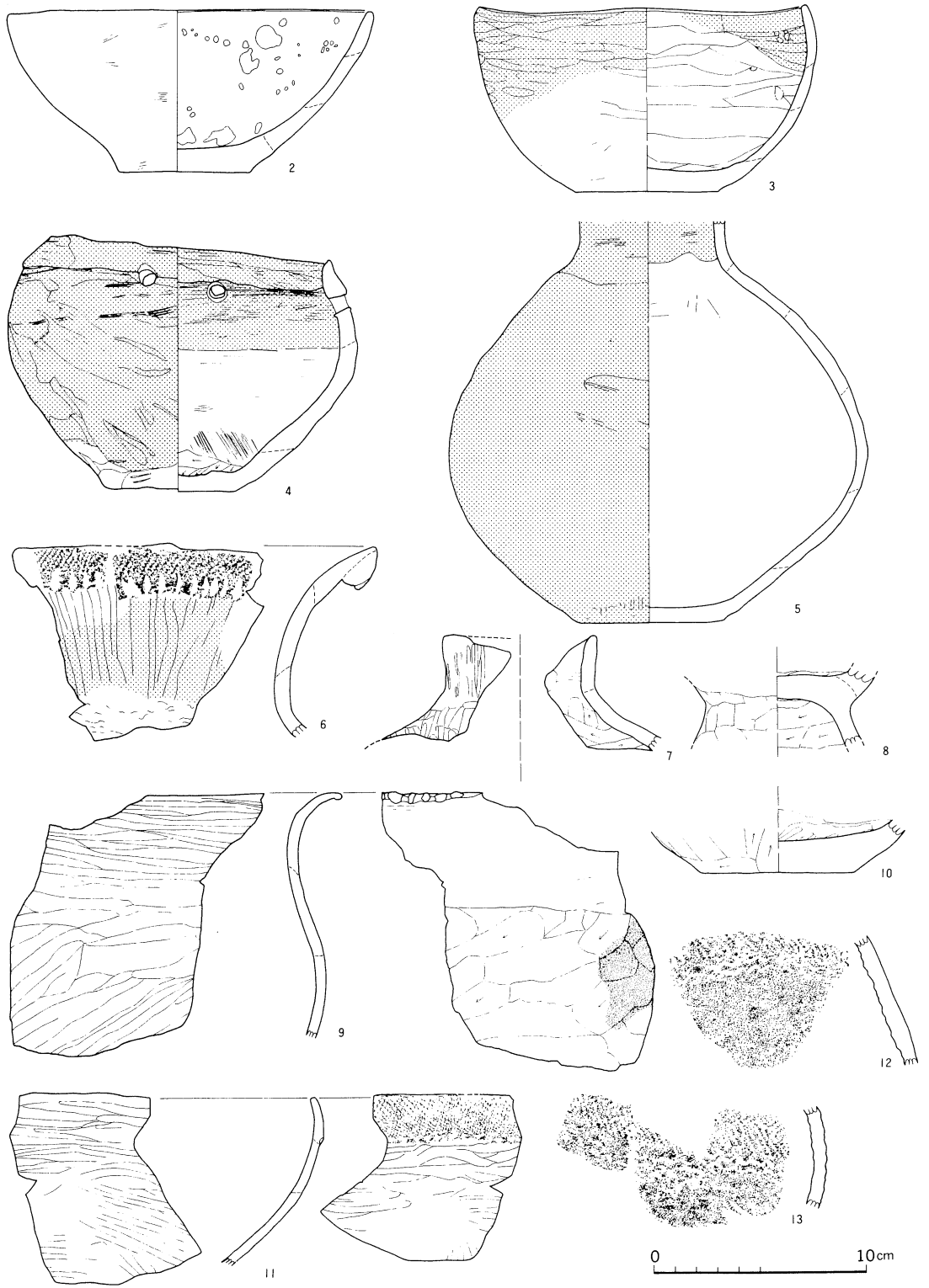


第14図 第5号遺構（住居址）出土遺物（I）

第6表 第5号遺構出土遺物観察表 I

※単位のないものは、cm（ ）は、推定

挿図番号	a 器種 b 出土位置 c 遺存度	法量 (cm)	器質 { d 胎土 e 焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外面	内面
図14 1	a. 台付甕 b. 南西側床 面直上 c. 口縁部の 一部を欠損 全体の90% 残存	口径22.4 口頸部径 19.9 胴部最大径 29.55 台部上位径 8.0 台裾部径 15.3 器高 36.0	d. 小礫1~2 mmを極少含 む。 e. 普通	大きめの台部は、八 の字状を呈し、甕胴 部は、球状で、胴部 最大径は、中位にあ る。口縁部は、やや 直立ぎみに立ち上が り、外反する。口唇 部は、押圧による波 状口縁を呈する。	台部一縦方向のヘラケズリ 胴部一斜め方向のヘラケズリ 胴中位一斜め方向のヘラケズ リの後、ヘラナデ 口縁部一横ナデ 口縁部から胴上位にかけて、 ススが残る。 〈色調〉 甕部一淡褐色 暗褐色 台部一淡赤褐色	台部一ヘラ削りの後、横方向 のハケ目有り、その後横 方向のナデ 胴部一横方向のヘラナデの後 斜め方向のナデ(ユビ?) 口縁部一横ナデ 一部ハケ状の横ナデ 〈色調〉 甕部一淡褐色 黒褐色 台部一淡赤褐色
図15 2	a. 鉢 b. 南西側床 面直上 c. 口縁部の 一部を欠損	口径17.1 底径6.1 器高7,65	d. 小礫1~3 mmを少量含 む。 e. 普通	平底の底部、体下位 は、やや内傾し、体 部は、大きく弧を描 いて碗状に立ち上が り、口唇部付近は垂 直に近くなる。	全体に横方向のヘラナデの後、 指ナデにより横及び斜め方向 にていねいに整形 〈色調〉 暗褐色、赤褐色 淡褐色	剥離が多い。全体に横方向 のヘラナデの後指ナデにより 横及び斜め方向にていねいに 整形 〈色調〉 口縁部一赤茶褐色 体部一黒褐色



第15図 第5号遺構（住居址）出土遺物実測図（II）

第7表 第5号遺構出土遺物観察表II

挿図番号	a 器種 b 出土位置 c 遺存度	法量 (cm)	器質 { d 胎土 e 焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外 面	内 面
図15 3	a. 鉢 b. 北側床面直上 c. 口縁部から体部の一部を欠損	口径15.35 底径6.75 器高8.7 体部最大径16.1	d. 小礫1mm以下を少量含む。 e. 普通	平底の底部より、丸みをもって碗状に立ち上がり、体部最大径は、口縁部にある。口唇部は、わずかに内傾する。	全体に横及び斜め方向のヘラナデ 〈色調〉 暗褐色 淡褐色 黒褐色	体部一横方向のヘラナデ 口縁部一横方向のヘラミガキ 口唇部一横方向のナデ 口縁部の一部に赤彩がある。 〈色調〉 暗褐色 赤褐色 黒褐色
図15 4	a. 鉢 b. 南西側床面直上 c. 完形	口径13.3 底径6.1 体部最大径16.4 器高12.0	d. 小礫1mm以下を少量含む。 e. 普通 口縁部及び底部の一部やや不良	平底より、球形に立ち上がり、最大径は、胴部上位にある。口縁部下端に、段をもち、穿孔(径7~8mm)が2ヶ所ある。また口縁部は内傾している。	体下位一横方向のヘラケズリ 体部一横方向のヘラケズリの後、横方向のハケ目調整、その後、斜め方向のヘラミガキ 全面に赤彩がなされる。 〈色調〉 淡赤褐色	体下位一縦方向のヘラケズリ 体下部一縦方向のハケ目 体中位一横方向のハケ目調整の後、横方向のユビナデ 口縁部一横及び斜め方向のハケ目調整 口唇部一横ナデ
図15 5	a. (壺) b. 南西側床面直上 c. 口縁部が欠損	胴部最大径20.7 底部径6.7	d. 1mm前後の小礫を含む。 e. 普通	底部は平底、胴部は、球状に立ち上がるが、胴部最大径は下位にある。口頸部は細くなり直立ぎみに立ち上がる。	底部一ヘラケズリ 胴下位一横方向のヘラケズリの後、縦方向のヘラミガキ 胴部一斜め方向のヘラナデ及びヘラミガキ 口頸部一横ナデ 〈色調〉 茶褐色、淡褐色	内外面とも摩耗し、剥離が多い。 胴部一摩耗が激しく凹凸が多い。胴上位にわずかに縦及び横方向のヘラナデがみられる。 口頸部一横ナデ 〈色調〉 淡褐色
図15 7	a. (壺) b. 北西側床面直上 c. 口縁部の一部のみ	口径(7.2)	d. 1~2mmの小礫を少量含む e. 良好	弧状に立ち上がる胴部をもつと考えられ、口縁部は、短かく直立する。	胴上位一斜め方向のヘラミガキ 口縁部一横方向のヘラナデの後、縦方向のヘラミガキ 〈色調〉 茶褐色	胴上位一横及び縦方向のヘラケズリ 口縁部一横方向のヘラミガキ 〈色調〉 淡褐色
図15 8	a. (台付甕の台部) b. 東側床面直上 c. 台部上位部分のみ	台部最小径(上位)6.8	d. 小礫1~2mmを含む e. 良好	台付甕の台部上位部分と考えられる。やや厚手の器肉をもち、ずんぐりした形体が感じられる。	煮沸器として使用されたためか、熱により摩耗が激しい。縦方向のヘラケズリ 〈色調〉 暗赤褐色	甕底部一ヘラナデ 台部一ヘラケズリダシ 〈色調〉 暗褐色
図15 10	a. (壺) b. 北西側床面直上 c. 底部のみ	底部径7.2	d. 少し緻密1mm以下の少礫を少量含む e. 普通	平底の底部	胴部下端一横及び縦方向のヘラケズリ 底部一ヘラケズリ 〈色調〉 暗褐色	底部一縦方向のヘラミガキ 〈色調〉 暗茶褐色

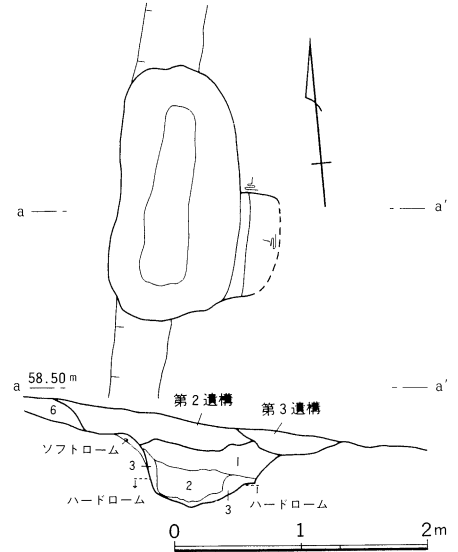
第8表 第5号遺構出土遺物観察表III

挿図番号	a 器種 b 器厚	器質 { c 胎土 d 焼成	形態、成整形、文様等の特徴及び色調	出土位置
図15 6	a. (壺)口縁部 b. 8.5mm	c. 1~2mmの小礫を含む。 d. やや不良	複合口縁の壺の口縁部と考えられる。胴部上位にS字状結節文がみられ、口頸部は、縦方向のヘラミガキ、口縁部には、LRの単節の縄文。複合部端部には、押捺による刻目がみられる。〈色調〉 両面淡褐色	東側床面直上
図15 9	a. (甕) 口縁部 b. 5mm	c. 小礫1~2mmを少量含む d. 良好	胴部外面一斜め方向のヘラケズリ、胴部内面一横及び斜め方向のナデ 口縁部外面一横ナデ一部下位に縦方向のナデ、口縁部内面一横方向のヘラミガキに近いナデ、口唇部には、押圧による波状口縁を有する。	北西側床面直上
図15 11	a. (鉢) b. 4.5mm	c. 1mm前後の小礫を含む d. 普通	体部外面一横方向のヘラミガキ、体部内面一横及び斜め方向のヘラミガキ、口縁部は単節縄文を施し、二重口縁端部に押捺による刻目を有する。器形は、体部が碗状に立ち上がり、口縁部は二重口縁で、直立ぎみに立ち上がり、口唇部では、やや内傾する。 〈色調〉 外面口縁部一黒褐色、体部一赤褐色、茶褐色 内面口縁部一茶褐色、体部一黒褐色	西側床面直上
図15 12	a. (壺) 胴部破片 b. 7mm	c. 2mm前後の小礫を少量含む。 d. 不良	内外面とも摩耗が激しい。外面は、一部に赤彩が認められ、上部にS字状結節文が横位にあり、その下部に羽状縄文を有する。内面は、剥離が激しい。〈色調〉 外面一暗褐色、内面一灰茶褐色	北西側床面直上
図15 13	a. (壺) b. 5.5mm	c. 緻密、1mm前後の小礫を極少量含む。 d. やや不良	No12に似ており、同一個体の破片と考えられる。	北西側床面直上

台付甕 (No. 1)、鉢 (No. 2)、鉢 (No. 4)、壺 (No. 5) が南西側床面より、鉢 (No. 3) が北側床面、壺片 (No. 5)、台付甕台部片が北東側床面、壺片 (No. 7)、壺片 (No. 10)、鉢片 (No. 11)、壺片 (No. 12, 13) が北西側床面より各々出土している。遺構覆土は、大きく 4 層に分けられ、下層には、焼土粒、炭粒が多く散布する。

(6) 第 6 号遺構 (土坑) <挿図16、図版 7>

第 2 号遺構の東側溝のほぼ中央付近で重複する。本遺構は、第 2、第 3 号遺構に切られている。遺構形体は、西側の長円形 (やや長方形に近い) の土坑と、それに南東側で付設するテラス状の落ち込みである。規模は、西側の土坑が、上端長軸 2.03m、短軸 0.88m、下端長軸 1.44m、短軸 0.34m、深さ 0.48m、東側のテラス状の落ち込みが長軸 0.84m、短軸 0.34m、深さ 0.24m、主軸方向は、西側土坑下端の長軸を測り、 $N-3^{\circ}-E$ である。西側の土坑は、逆台形状の立ち上がりを示し、底部は、やや凹凸がみられるが、ピットにはいたらなかった。東側のテラス状の落ち込みは、ほとんど落ち込み部分であり、緩らかな立ち上がりを土層セクションから伺える。覆土は、3 層認められる。伴出遺物はない。



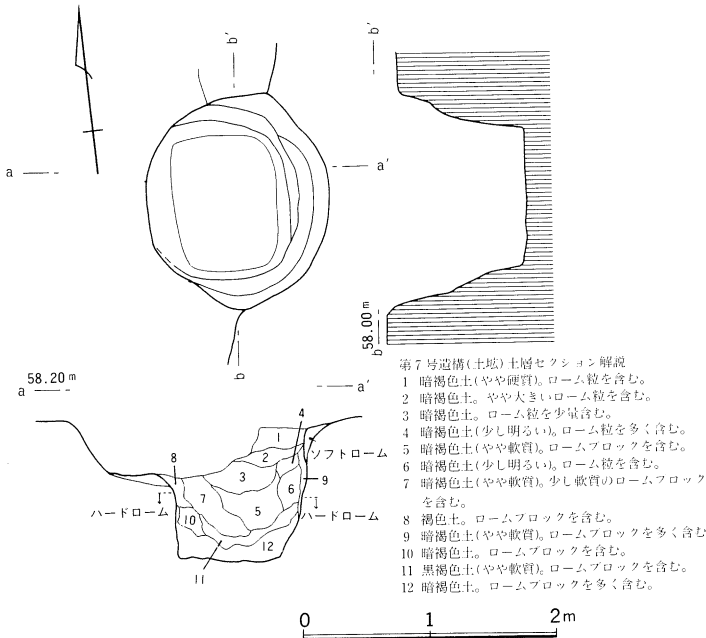
第 6 号遺構 (土坑) 土層セクション解説
 1 暗褐色土 (明るい)。ロームブロックを含む。
 2 暗褐色土 (少し軟質)。やや大きめのローム粒を含む。
 3 褐色土。ロームブロックを多く含む。

第 16 図 第 6 号遺構実測図

(7) 第 7 号遺構 (土坑)

<挿図17、図版 7>

第 2 号遺構の西側溝のほぼ中央付近に位置し、第 2 号遺構に切られている。平面形は、上端が隋円形を呈し、下端は、隅丸長円形である。規模は、上端長軸 1.63m、短軸 1.44m、下端長軸 1.08m、短軸 0.81m、深さ 1.12m、はかる。主軸方向は、 $N-13^{\circ}-W$ である。立ち上がりは、急傾斜で深く、南側を除いて、2~3 段の中端がみられる。底部は、中央付近が最も低い。概して平坦であり、ピットは存在しない。本遺構内の覆土は、自然埋没と考えられ、12 層に



第 7 号遺構 (土坑) 土層セクション解説
 1 暗褐色土 (やや軟質)。ローム粒を含む。
 2 暗褐色土。やや大きいローム粒を含む。
 3 暗褐色土。ローム粒を少量含む。
 4 暗褐色土 (少し明るい)。ローム粒を多く含む。
 5 暗褐色土 (やや軟質)。ロームブロックを含む。
 6 暗褐色土 (少し明るい)。ローム粒を含む。
 7 暗褐色土 (やや軟質)。少し軟質のロームブロックを含む。
 8 褐色土。ロームブロックを含む。
 9 暗褐色土 (やや軟質)。ロームブロックを多く含む。
 10 暗褐色土。ロームブロックを含む。
 11 黒褐色土 (やや軟質)。ロームブロックを含む。
 12 暗褐色土。ロームブロックを多く含む。

第 17 図 第 7 号遺構 (土坑) 実測図

分けることができる。伴出遺物はない。

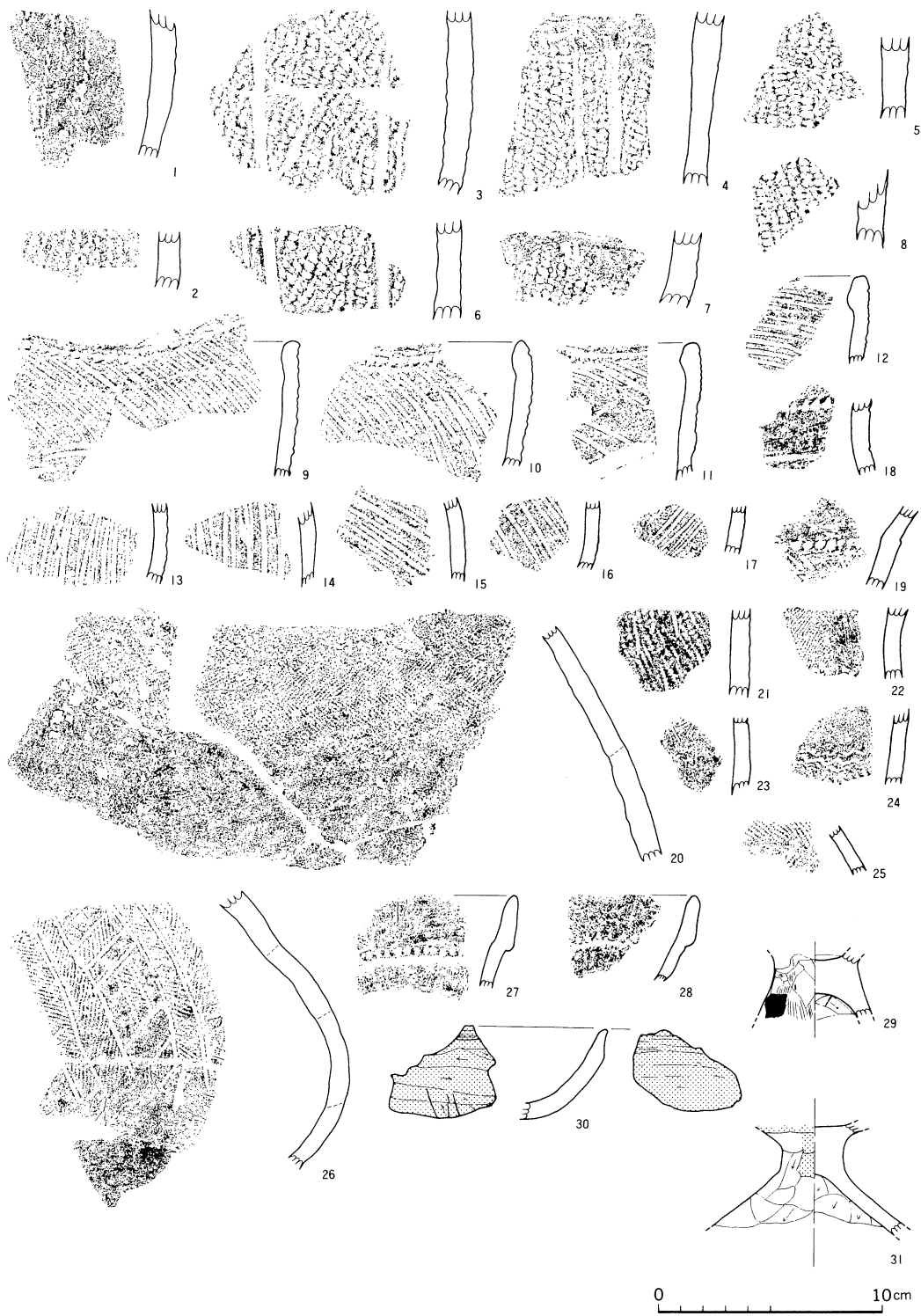
(8) その他の出土遺物 〈挿図18、図版9、10〉

ここでは、直接遺構に伴わないと考えられる覆土、表採などの出土遺物を取り上げた。

第9表 その他の出土遺物

※器種の()は推定

挿図番号	a 器種 b 器厚 他	器質 c胎土 d 焼成	形態、成整形、文様等の特徴及び色調	土器型式名
図18 1	a. (甕) b. 1.1cm	c. 1mm前後の少礫を 少量含む。 d. やや良	縦方向の撚糸文で4条単位? やや間隔が広い、原体Rで単軸絡条体の回転手法と考えられる。 〈色調〉 外-淡褐色(一部淡赤褐色)、内-黒褐色及び淡褐色	稲荷台
図18 2	a. (甕) b. 1.05cm	c. 1mm前後の少礫を 含む。 d. 普通	原体LRの節のやや太い撚糸文を縦方向に施す。5~6条単位か? 〈色調〉 外-暗褐色及び茶褐色、内-暗褐色及び黒褐色	稲荷台
図18 3 ~8	a. (甕) b. 0.85cm ~1.25cm	c. やや荒い。 一部に2mm前後の小 礫を含む。 d. 良好	LRの単節縄文を地文とし、縦方向の沈線が入る。また、No4は、上部に磨り消した無文帯が横方向に存在する。 〈色調〉 両面茶褐色及び暗茶褐色	加曾利E I
図18 9 ~12	a. (甕) b. 0.6cm ~0.8cm	c. 1mm前後の小礫を 多く含む。 d. 良好	口縁部付近の破片で、口唇部内側は厚い。外側は、刺突文が横方向に施し、下位にヘラ描き沈線を文を知る。No9は、ヘラ描きの方向が2方向みられる。〈色調〉 外-暗茶褐色及び黒褐色、内-暗褐色	加曾利B II
図18 13 ~17	a. (甕) b. 0.6cm 0.8cm	c. 1mm前後の小礫を 多く含む。 d. 良好	胴部付近の破片で、外面に斜めのヘラ描き沈線文を施す。No9~12と同種の個体片と考えられる。色調も同様である。	加曾利B II
図18 18	a. (甕) b. 0.85cm	c. 1mmの小礫を含む。 d. 良好	口縁部付近と考えられる。上部に刺突文を施し、その下にヘラによるナデ、さらにその下に沈線が横に1本走る。〈色調〉 両面-暗褐色	加曾利B
図18 19	a. (甕) b. 0.9cm	c. 1mmの小礫を含む。 d. 良好	刺突文の下にヘラ描き沈線文が斜め方向に施される。 〈色調〉 外-茶褐色、内-茶褐色	加曾利B
図18 20	a. (壺) b. 1.05cm	c. 1mm前後の小礫を 多く含む。 d. 普通	胴部付近の破片と考えられる。外面には、赤彩が認められ、内面は、摩耗がひどく剝離している。外面下位は、横方向のヘラミガキがなされ、上位には、数段のS字状結節文を上下に施し、間にRL、LRの単節の羽状縄文を配する。〈色調〉 外-暗褐色、内-淡明褐色	弥生町
図18 21	a. (壺) b. 0.85cm	c. 1mm前後の少礫を 少量含む。 d. やや不良	RLの縄文が斜行する文様を配する。やや摩耗有り。 〈色調〉 外-淡褐色 内-暗褐色	弥生町
図18 22	a. (壺) b. 0.7cm	c. 1~3mm前後の小 礫を少量含む。 d. 良好	外面は、斜行する縄文にヘラミガキによる磨り消した無文帯を縦に配する。両面に一部赤彩有り。内面は、横方向のヘラミガキ 〈色調〉 外-暗褐色、内-茶褐色	弥生町
図18 23	a. (壺) b. 0.75cm	c. 緻密、1mm以下の 小礫を極少量含む。 d. 普通	胴部付近の破片と考えられる。斜行する単節の縄文を沈線で区画し、山形文を形づくる。また、赤彩がなされる。内面は、ナデ 〈色調〉 外-暗赤褐色、内-淡褐色	弥生町
図18 24	a. (壺) b. 0.7cm	c. 1mmの小礫を含む。 d. やや不良	胴部付近の破片と考えられる。S字状結節文を3~4段配し、その下に斜行する縄文を施す。やや摩耗している。 〈色調〉 外-淡褐色、内-暗褐色	弥生町
図18 25	a. (壺) b. 0.55cm	c. 緻密、1mm以下の 小礫を含む。 d. やや不良	胴部付近の破片と考えられる。LR、RLの単節の斜縄文、羽状に組み合わせている。内面はナデ。 〈色調〉 外-暗赤褐色、内-淡褐色	弥生町
図18 26	a. (壺) b. 0.9cm	c. 少し緻密、1mm以 下の小礫を含む。 d. 良好	胴部付近と考えられる。格子状の沈線で囲まれた単節の縄文を配する。一部に赤彩がみられる。内面は、ていねいなナデ 〈色調〉 外-淡褐色、黒褐色 内-淡褐色	久ヶ原
図18 27	a. (壺) b. 0.65cm	c. 1mmの少礫を含む。 d. 普通	有段口縁の壺の口縁部片と考えられる。有段部に押圧による刻目がみられる。口縁部は横ナデ、胴上位は、縦方向のヘラミガキ内面は、横方向のヘラミガキ 〈色調〉 外-茶褐色、内-暗褐色	弥生町
図18 28	a. (壺) b. 0.55cm	c. 1mmの少礫を含む。 d. 普通	有段口縁の壺の口縁部片と考えられる。口縁部に斜行する縄文を配し、段部は、押圧による刻目を施す。内面は、横方向のヘラミガキ 〈色調〉 両面-茶褐色	弥生町
図18 29	a. (高坏) b. 最短径 3.2cm	c. 1~2mmの小礫を 極少量含む d. 良好	脚部片と考えられる。外面の一部に赤彩有り。 外面 脚部上位-横方向のヘラケズリの後、縦方向のハケ目調整 内面 坏部下位-ナデ、脚部上位-ヘラケズリダシ 〈色調〉 外-暗褐色 内-坏部=黒褐色 脚部=暗赤褐色	五領
図18 30	a. (鉢) b. 0.8cm	c. 緻密、1mm以下の 小礫を少量含む。 d. 良好	外面 体部下位-縦方向のヘラケズリの後、再び横方向のヘラケズリ 口縁部-横ナデ 内面 体部-横方向のヘラナデ、口縁部-横ナデ 内外面とも赤彩有り。〈色調〉 両面とも赤褐色	五領
図18 31	a. (高坏) b. 脚部上位 径2.75cm	c. 緻密、1~2mmの 小礫を極少量含む。 d. 良好	外面 坏部下位-横方向のヘラナデ、脚上位-縦方向のヘラケズリの後、一部横方向のナデ 内面 坏部底部-ナデ 脚部-縦方向のヘラケズリの後、横方向のナデ、内面の坏部に一部赤彩有り。〈色調〉 外-淡赤褐色、内-淡褐色	五領



第18図 その他の出土遺物

IV ま と め

調査した遺構は、保存状態が悪く、上層や、遺構の一部が既に無いものがほとんどであったが、7基検出した。第1号遺構は、墳丘がわずかに確認できた。方形に囲る壕をもっているが、東側の大部分が現存しないため、墳形に関しては不明である。遺物は、No.1壺、No.5壺胴部片が北西側壕底部付近より、墳丘側からの流れ込みの状況を呈して、かなり細片で出土した。また、No.2埴、No.4器台が西側壕底部付近より、外側からの流れ込みの状況で、さらにNo.3埴が同じく西側壕底部中央付近より出土した。いずれも赤彩を施され、ていねいに作られており、器種からみても供献土器と推定される。伴出遺物が少ない中で、これらの遺物は、当遺構の時期を考える上で重要である。No.1壺は、有段口縁をもち、外面にヘラミガキがなされ、内面は、ハケ目調整が残る。また、No.5壺は、胴部付近の破片で、No.1壺に似るが、同一個体ではない。さらに、No.3埴は、小型丸底埴であり、No.2埴やNo.4器台とも、五領式の古い時期に属すると考えられる。第2号遺構は、長軸12.13mで古墳としては、小規模であり、また、保存状況が良くない面もあったが、墳丘が確認できない点などから、方形周溝状遺構の可能性がある。第3号遺構は、一部分の調査ではあるが、第2号遺構を切っていることや小規模な点などから、やはり、方形周溝状遺構と推定される。しかし、両者とも、伴出遺物や覆土中より新しい遺物は、出土していない。第5号遺構は、竪穴住居址で胴張りの隅丸方形を呈する。No.1～No.13の破片を含む土器が床面直上より出土している。No.1台付甕やNo.3鉢などは、外側からの流れ込みの状況を示しているが、完形に近い土器は、本遺構に伴なうと考えたい。No.1は、口唇部に刻目をもち、球状の胴部を呈する台付甕で、台部内面には、ハケ目が残る。No.2～4は、いずれも鉢で、特にNo.4は、口縁部に粘土貼り付けによる段をもち、内外両面に少量ではあるが、ハケ目調整がみられる。これらは、いわゆる久ヶ原式期から弥生終末の時期と考えたい。第4号遺構は、伴出遺物はみられないが、炉址をもつ胴張りの隅丸長方形の竪穴住居址であり、第5号遺構に近似する時期と考えられる。第6号遺構は、東南側に落ち込みを付設する土壇で、西側の土壇は、覆土が埋めもどした様な状況であり、やや底部に凹凸があるものの、第2号遺構に伴なう主体部（地下式壇）の可能性もある。第7号遺構は、不整円形の深い土壇であり、覆土は、自然堆積を示しており、第6号遺構と対比する位置にあるが、主体部とは考えにくく、おそらく、縄文時代のいわゆる陥し穴状土壇と推定している。この他に、当遺跡は、縄文早・中・後期などの土器片や古墳群が現認できることから、未調査地も濃密な遺構分布が伺える。

以上、簡単に概括したが、川中遺跡は、縄文から古代にいたる遺構、遺物を検出し、特に五領式期の古墳等の検出が特徴的であった。村田川流域における当該期の遺跡は、下鈴野、西山、草刈、川焼台など多くの調査例があるが、今後これらの遺跡の様々な関連性を、同時期の古墳群も含め、究明してゆかなくてはならない。

写真図版



川中遺跡調査風景(北側より)



調査前の状況(北側より)。既に上部は削平等により荒廃しており、元の山林のおもかげはみられない。中央やや左寄りの木株の存在する部分が第1号遺構、後方の4階建物は、市東中学校。



調査地遠景(南側より)。遺跡は、中央台地に位置する。調査地は、写真中央部、削除された台地上。手前の低地は、東京湾に注ぐ村田川の支流の谷田である。谷田より遺跡のある台地までの比高は、約30mをはかる。右手後方の崖面には、中期洪積世の中ほどの時期と考えられている古東京湾の貝層を含む「瀬又層」が検出できる。左手の道路は、県道瀬又一金剛地線。



第1号遺構(古墳)北側より
台地端部立地の様子がよくわかる。右側(西側)周壕内に出土遺物(No.1～No.5)がみえる。
左側(東側)は、オーバーハングしているため端部までは、調査できなかった。



第1号遺構(古墳)遺物出土状況(No.1・5)(西側より)
古墳北西側周壕内の底部より約5cm上部に細片で出土した。墳丘側の遺物がやや出土位置が高い。上は、墳丘側の周壕落ち込み面。



第1号遺構(古墳)遺物出土状況(南側より)
西側周壕内より出土した土器群(No.1~No.5)。奥より手前まで約60cm低くなる。



第1号遺構(古墳)遺物出土状況(東側より)
No.2~No.4とも周壕底部より約5~10cm上部より出土した。

図版 4



第1号遺構(西側より)。台地端部に位置しているため、周壕は、北側より南側に約2.3cmの高低差をもつ。墳丘は、最大で約35cm残存していた。手前の南西側隅部は、攪乱により変形。



第2号遺構全景(北側より)、左側(東側)溝内に第6号遺構、右側(西側)溝内に第7号遺構が重複して存在する。墳丘は確認できない。南西側の周溝は、かなり削平され、保存状況は悪い。



第3号遺構(西側より)
掘削のため西側 $\frac{1}{3}$ 程度の調査に終る。手前に第6号遺構(土壇)が重複している。墳丘は確認できず、周溝の深さも浅い、左側(北側)の周溝は、溝状の攪乱が入る。



第4号遺構(住居址)全景(北側より)。保存状況が悪く、壁は約25cmしか残存しない。床面全体に焼土粒が散在する。踏み固められた面は、中央部に明確に認められる。



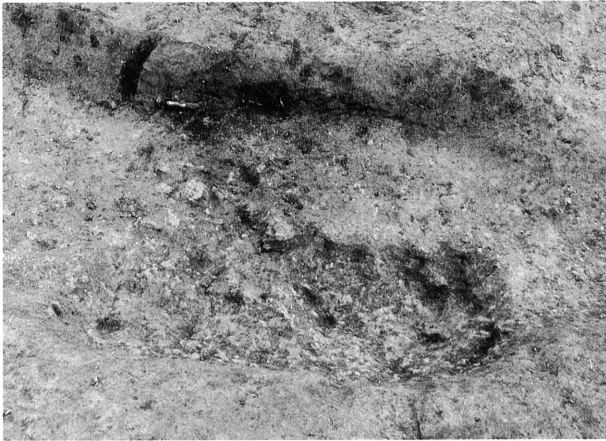
第5号遺構(住居址)全景(西側より)。第2号遺構内に重複して存在し、焼土・炭が多く検出された。壁溝が幅広く、踏み固めた床面が明確であった。出土遺物も比較的多い。



第5号遺構(住居址)遺物出土状況(東側より)(No.1・2・4・5)
南西隅側の遺物ほどやや出土位置が高い。他は、ほぼ床面直上。遺物群のほぼ中央付近床面に柱穴(P.2)が存在する。右上のピットは、P.5である。



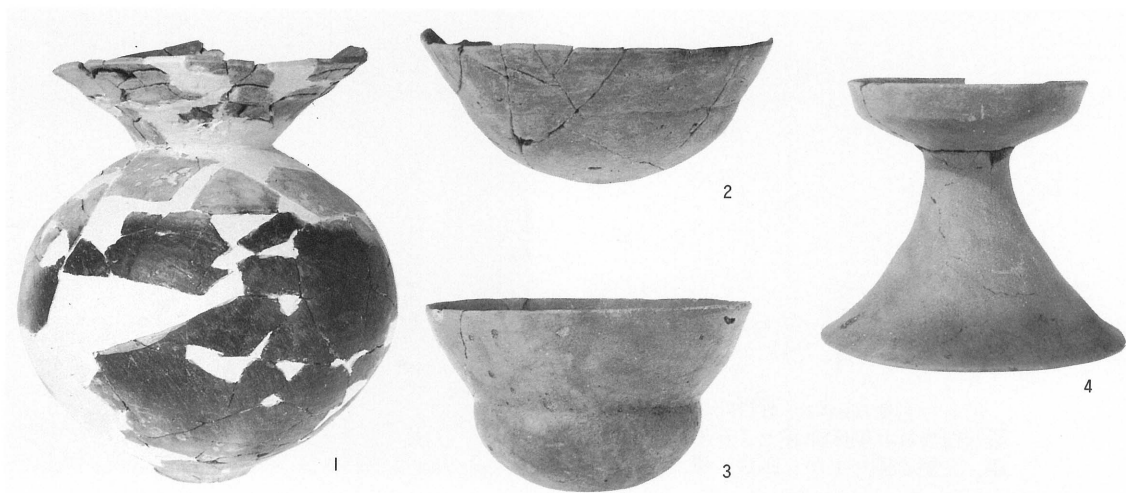
第5号遺構(住居址)遺物No.3出土状況
竪穴住居址北側床面直上より出土した碗形土器。
左側の盛り上がり面は、焼土の流れ込み。



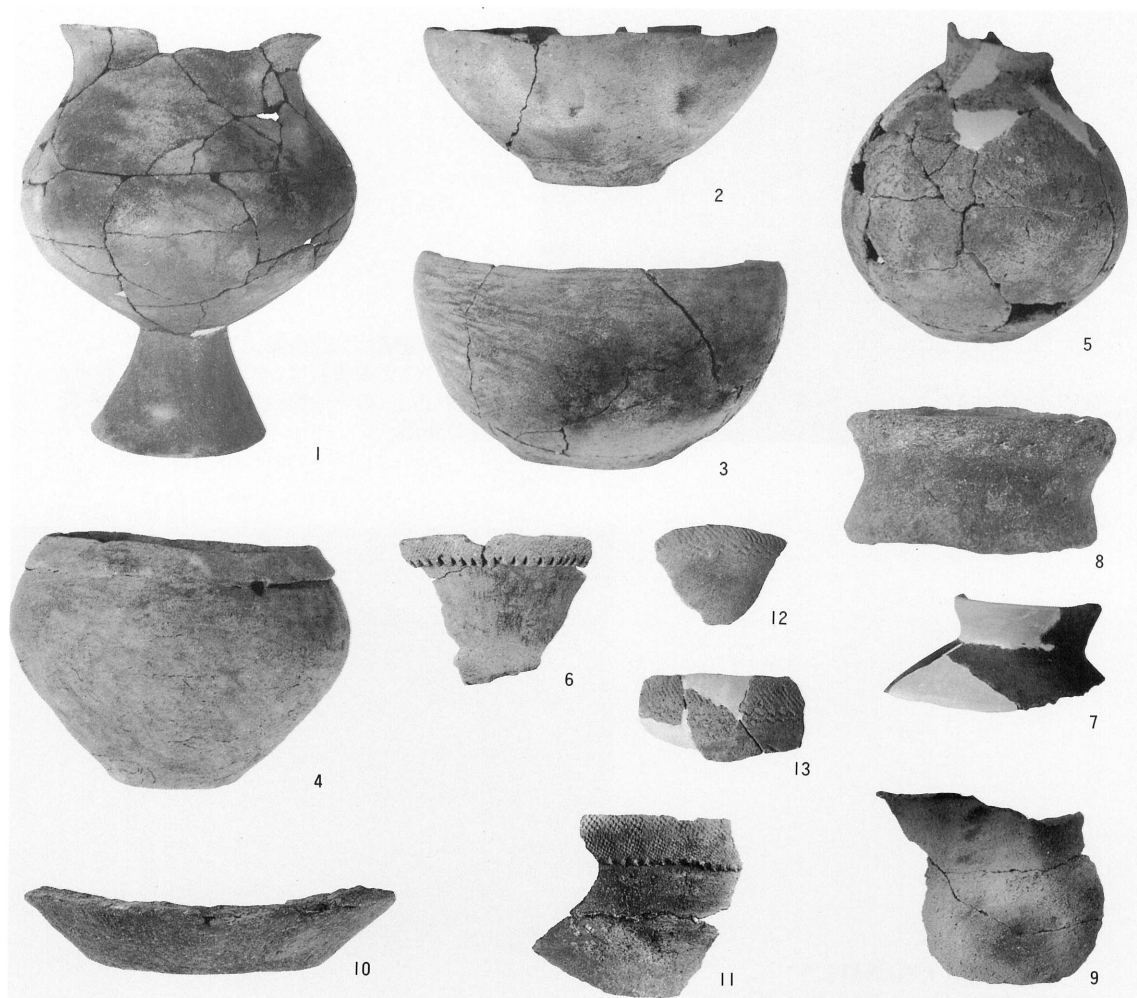
第6号遺構(土壇)西側より
西側(下)の土壇底部は、やや凹凸がみられる。
東南側(右上)の一段高い部分は、落ち込み及び溝の底部。



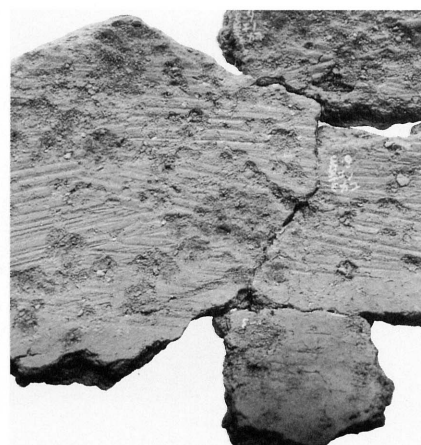
第7号遺構(土壇)西側より
第2号遺構の溝に上端(手前)が切られており、
一段低くなっている。



(1) 第1号遺構(古墳)出土遺物(I)以下番号は、挿図番号と同じ

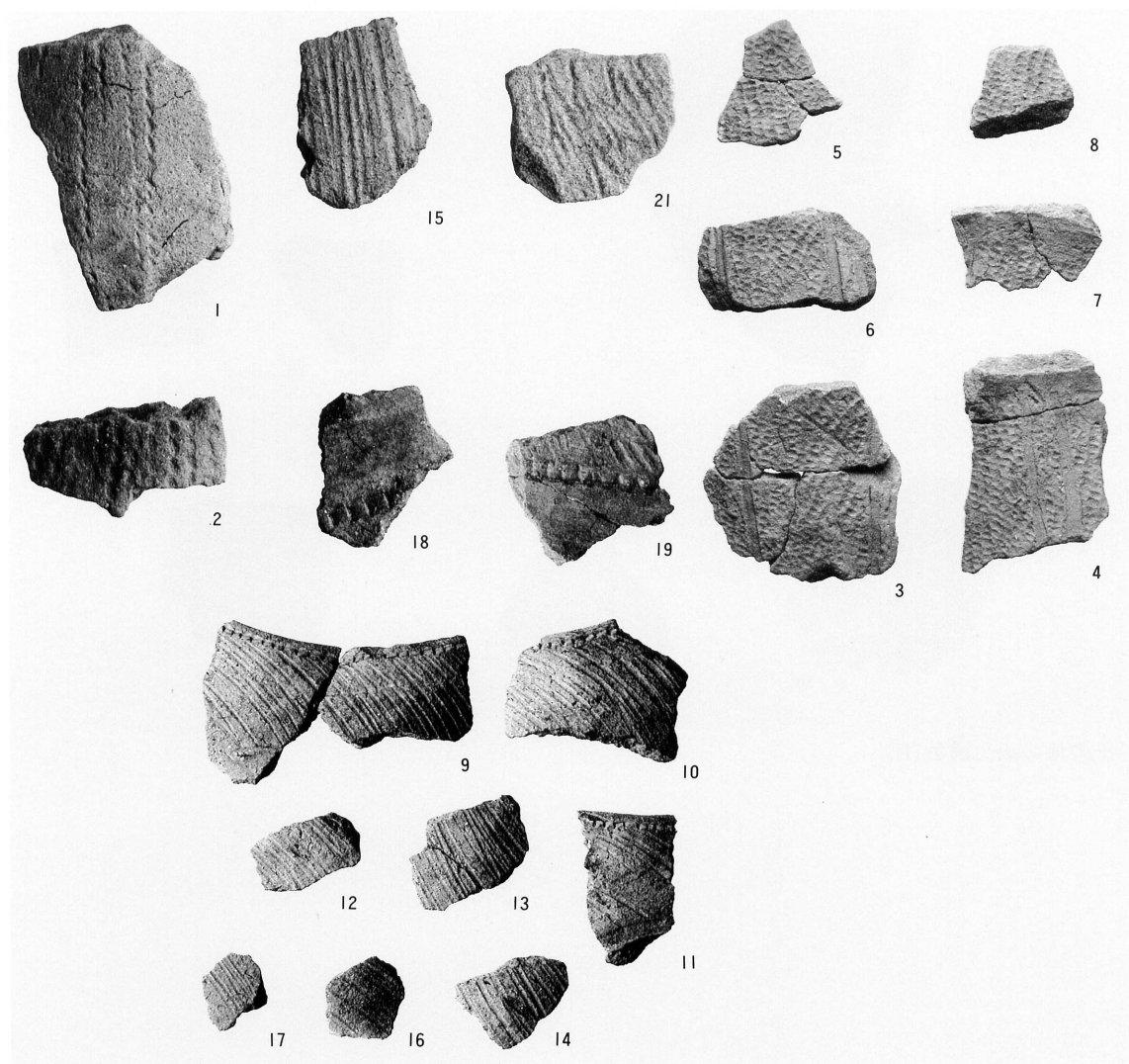


(2) 第5号遺構(住居址)出土遺物

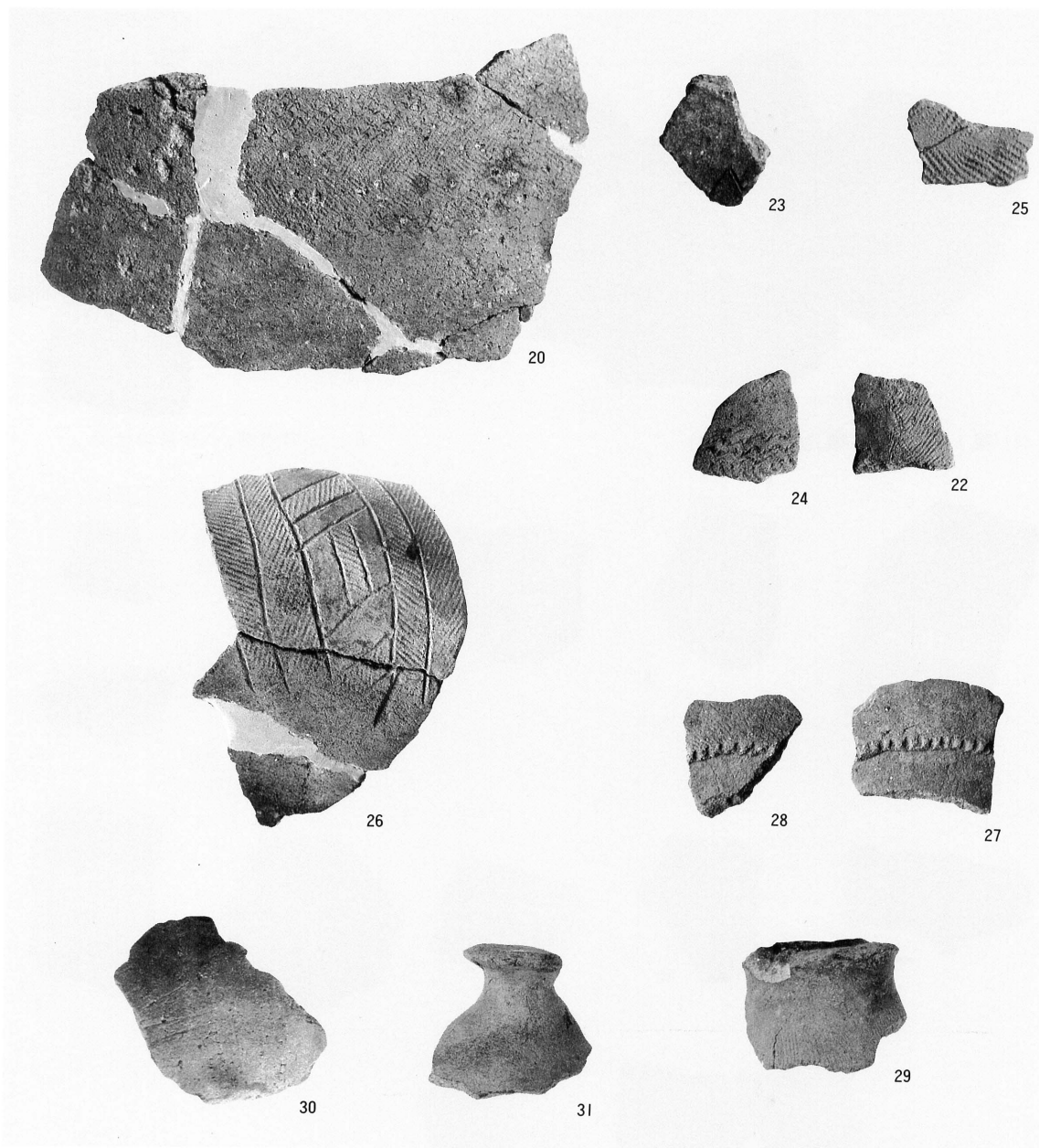


(I) 第1号遺構(古墳)出土遺物(II)

6. 5の内側、ハケ目の状況



その他の出土遺物(I)



その他の出土遺物(II)

財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第13集

川 中 遺 跡

昭和62年 3月16日 印刷

昭和62年 3月26日 発行

編 集 財団法人 市原市文化財センター

発 行 若 菜 建 設 株 式 会 社

財団法人 市原市文化財センター

千葉県市原市馬立817番地

TEL 0436(95)2755

印 刷 株式会社 弘 文 社

千葉県市川市市川南2-7-2

TEL 0473(24)5977